

瓜 破 北 遺 跡 IV

—府営瓜破二丁目住宅建替えに伴う発掘調査—

平成29年2月

大阪府教育委員会

瓜破北遺跡Ⅳ

—府営瓜破二丁目住宅建替えに伴う発掘調査—

大阪府教育委員会

序 文

瓜破北遺跡は、大阪市平野区に所在し、大阪府南部の丘陵から北に延びる河内台地の先端部に立地します。台地の先端は瓜破台地とも呼ばれており、現在は埋没していますが南に開口するいくつかの谷があり、起伏に富んだ地形であったことがわかっています。

瓜破の地に初めて人々の生活が営まれるのは、後期旧石器時代です。その後、縄文時代から現在にいたるまで連続として人々はこの地で生活を続けてきています。いかに生活に適した場所であることがわかります。

今回の発掘調査は、府営瓜破二丁目住宅建替えに伴うものであり、これまで平成19年、平成23年にも発掘調査が実施されています。これらの調査の結果、後期旧石器時代から近世に至るまでの遺構や遺物が発見されています。今回の調査でも古墳時代の遺構や、埋没谷を検出することができました。

最後になりましたが、調査の実施にあたり、地元関係者ならびに大阪府住宅まちづくり部の方々には多大なご協力をいただきましたことに深く感謝いたしますとともに、今後とも大阪府の文化財保護行政により一層のご理解とご協力をお願いいたします。

平成29年2月

大阪府教育庁文化財保護課長
星住 哲二

例 言

1. 本書は、大阪府教育委員会が大阪府住宅まちづくり部の依頼を受けて平成26年度に実施した、府営瓜破二丁目住宅建替えに伴う、大阪市平野区瓜破二丁目所在の瓜破北遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、文化財保護課調査第一グループ課長補佐 宮野淳一の指導の下、同主査 井西貴子を担当者として実施した。
3. 遺物整理は、文化財保護課調査管理グループ副主査 藤田道子、同専門員阪田育功、調査事業グループ（平成27年9月より文化財企画グループ）主査 井西貴子を担当者として平成27・28年度に実施した。
4. 発掘調査の調査番号は、14020である。
5. 本調査における写真測量は、大阪測量株式会社に委託して実施した。撮影フィルムは同社が保管している。
6. 本書に掲載した遺構写真の撮影は発掘調査担当者が行い、遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
7. 本書の執筆は調査員岡林孝之、西村雅美、藤井信之、調査補助員木村まり、と井西が分担し、編集は井西が行った。
8. 本調査で作成した写真、図面等の記録等と出土遺物は、大阪府教育委員会で保管している。
9. 発掘調査・遺物整理ならびに本書の作成に要した費用は、大阪府住宅まちづくり部が負担した。
10. 本書は、300部を作成し、一部あたりの単価は853円である。

凡 例

1. 発掘調査で行った測量は、世界測地系平面直角座標（第Ⅵ系）に基づく。水準は、T.P.（東京湾平均海面）を用い、方位については、座標北で表した。
2. 遺構名の表記は、調査時に遺構面毎に検出した順に1から通し番号を付けた。整理段階で遺構の形態・種類を表す文字を頭に付した。
3. 本書に掲載した遺物番号は、挿図にした後、1から通し番号をつけたものである。遺物実測図・遺物写真すべてに共通する。整理段階でのピックアップ番号（遺物実測番号）とは異なる。
4. 地層の土色の色調は、小山正忠・竹原秀夫編 2004年版『新版 標準土色帖』農林水産省技術会議事務局事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に拠った。

目 次

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過	
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 調査の方法	1
第2章 位置と環境	
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査成果	
第1節 基本層序	13
第2節 遺構と遺物	
第1項 第0面	19
第2項 第1面	29
第3項 第2面	32
第4項 第3面	33
第4章 総括	
大和川航空機製作所について	39
まとめ	42

挿図目次

第1図 地区割り図	1
第2図 調査地周辺 発掘調査地・遺跡分布、旧谷地形復元図	3
第3図 A—A'ライン（第2図）断面模式図	5～6
第4図 戦後（昭和23年）航空写真に見られる地割	11
第5図 土層断面柱状図 No.1	15
第6図 土層断面柱状図 No.2	16
第7図 土層断面柱状図 No.3	17
第8図 土層断面柱状図 No.4	18
第9図 「瓜破地区字限図」と4区遺構配置図	19
第10図 第0面東半 遺構平面図	20
第11図 第0面西半 遺構平面図・断面図	21

第12図	第0面	4区	遺構完掘状況図	23
第13図	第0面	4区	島畠断面図	23
第14図	第0面	4区	溝40出土遺物	24
第15図	島畠復元予想図			25
第16図	東瓜破村下絵図			26
第17図	第1～1-3層	出土遺物		27
第18図	第1面	遺構平面図		28
第19図	第1面	落ち込み 出土遺物		29
第20図	第1面	遺構断面図		29
第21図	第2層	出土遺物		30
第22図	第2面	遺構全体図		31
第23図	第3層	出土遺物(1)		32
第24図	第3層	出土遺物(2)		33
第25図	第3面	遺構全体図		34
第26図	第3面	遺構平面図・断面図(1)		35
第27図	第3面	遺構平面図・断面図(2)		36
第28図	第3面	遺構平面図・断面図(3)		37
第29図	第3面	遺構平面図・断面図(4)		38
第30図	第3面	溝10出土遺物		39
第31図	大和川航空機製作所(写真)			43
第32図	工場配置図			43
第33図	大和川航空機製作所周辺写真			44
第34図	大和川航空機製作所周辺地図			44

表目次

表1	調査地周辺発掘調査地	12
表2	瓜破北遺跡における主な既往の調査一覧	12

図版目次

図版	調査地より二上山を望む		
図版1	1区断面	上:南壁	下:西壁
図版2	2・3区断面	上:2区西壁	下:3区西壁
図版3	3区断面	上:北壁	下:東壁

- 図版4 4区断面 上：南壁 下：東壁
- 図版5 第0面遺構 上：4区全景（西半部） 中：4区全景（東半部） 下：4区坪境
- 図版6 第0面遺構 上：4区溝36 中：4区溝40 下：4区畦畔56
- 図版7 第1面遺構 上：1区全景 中：2区全景 下：3区全景
- 図版8 第1面遺構 上：4区全景 中：4区土坑4 下：4区土坑41
- 図版9 第2面遺構 上：1・2区全景 中：3区全景 下：4区全景
- 図版10 第2面遺構 上 1区土坑1 中：1区ビット2・3 下：2区 足跡
- 図版11 第3面遺構 上：1区溝6・9 中：3区溝10 下：3区ビット28
- 図版12 第3面遺構 上：4区溝43 中：4区溝46 下：4区ビット48
- 図版13 第3面遺構・下層確認トレンチ 上：4区溝50 中：下層確認トレンチ全景 下：下層確認トレンチ 溝59
- 図版14 1-2層・1-3層出土遺物
- 図版15 2層・2-1層・2-2層・2-3層・3層出土遺物
- 図版16 3層出土遺物
- 図版17 溝40（第0面）・落ち込み・自然流路10下層・3層出土遺物
- 図版18 2-1層・3層出土遺物
- 図版19 3層出土遺物
- 図版20 2-2層出土遺物

第1章 調査の経緯と経過

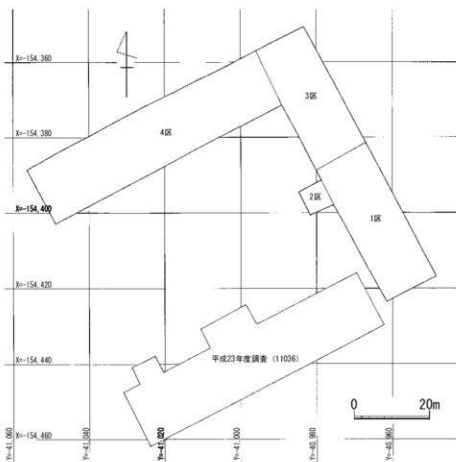
第1節 調査の経緯と経過

本調査地は大阪市平野区瓜破二丁目に所在する。今回の調査は昭和30年代に建設された府営住宅が老朽化したため、その建替えに伴うものである。平成元年（1989年）の試掘調査（財）大阪市文化財協会）の結果を受け、第1期調査を（財）大阪市文化財協会（2009年「瓜破北遺跡発掘調査報告書 V」が、第2期調査を大阪府教育委員会（2011年「大阪府埋蔵文化財調査報告2012-3「瓜破北遺跡」-府営瓜破二丁目住宅建替えに伴う発掘調査-）が実施した。今回の調査をもって府営瓜破二丁目住宅の建替えに伴う発掘調査（第2期）は終了した。

第2節 調査の方法

調査は、調査期間を短縮するために掘削土を搬出することにしてはいたが、土壌検査のための期間を確保するため、便宜上、機械掘削土の一部を仮置きすることとなった。その仮置き場を考慮に入れて、調査に入る順番を決め調査区を設定した。最初に始めた南北に長い調査区の南側を1区、エレベーター部分を2区、北側を3区、東西に長い調査区を4区とした。

盛土・近世までの堆積層を重機で掘削し、それ以下の層を人力によって各層ごとに調査を実施した。調査地の土層は浅層かの作土層が確認されたため遺物は層ごとに取り上げた。しかし、遺構面として写真・図面などの記録作業をおこなったのは三面である。また、4区に関しては、盛土を除去した後、近世の遺構面が極めて良好に保存されていたので、急速遺構検出に努め記録を残した（第0面）。各遺構面は調査



第1図 地区割り図

の迅速化をはかるため、クレーンによる写真測量を実施した。個々の遺構については各遺構面を通し番号を付け、本報告でもその番号を踏襲しているが、遺構の種類が確定できるものは番号の頭にその種類を付した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境（第2・3図）

瓜破北遺跡は大阪市南東部、平野区瓜破西一丁目、瓜破一丁目～三丁目、瓜破東一丁目・二丁目に所在する。地形としては、南から北に延びる河内台地の中央部以西の先端部と、更に台地より西方に広がる沖積地にかけて立地する。河内台地は、羽曳野丘陵から北に向かって派生する。1704年(宝永元年)に付け替えられた大和川によって分断されて以降、特に大和川以北の河内台地は、瓜破台地と呼ばれている。瓜破台地の西側は、急傾斜で低位段丘層が未発達である。そのため沖積地との境は明瞭で、比高差は約5mを測る。これに対し北側から東側は、緩やかに傾斜する。中位段丘層を削りながら発達した低位段丘層には、沖積地への際立った傾斜変換点はみられないものの、段丘面には西から西谷・東谷・馬池谷と呼ばれる開析谷が認められる。現在の地形でも台地を東西方向に眺めると、それに伴う起伏が確認できる。このように台地の縁辺から沖積地にかけての様相は、台地の西側と東側で異なる。瓜破台地縁辺の地形の差異は、遺跡の分布に影響していると思われる。第2図にみるように周辺では数多くの調査が行われている。各時代を通じて、台地の東側は遺構密度が濃く平面的にも広がりを見せるが、西側は薄い傾向が窺える。

瓜破北遺跡周辺の旧地形の復元については、長原遺跡において確認された暗色を帯びた地層（以下「暗色帯」という）を鍵層として、出土遺物の年代、火山灰層、C14年代などによって把握された標準層序に基づいた検討が確立している（大阪市文化財協会2001）。また、現在の喜連瓜破駅から瓜破台地以東にかけては、ボーリング調査やUR07-1・4次とUR09-2次の調査で、阪神高速道路周辺やその西側ではUR04-1～3次並びに11-1次・12-1次の調査で、表層地形とその形成過程が検討されている（趙2001・大阪市文化財協会2006・2011、大阪府文化財センター2013）。近年、調査事例の少なかった瓜破台地西側縁辺でも発掘調査が実施され、段丘構成層を確認するとともに、データが蓄積されてきた。UR07-2次調査で長原標準層序との対応がなされており、遺跡全体を通して地形等の復元・検討が可能な状況が整ってきている。ここでは、瓜破北遺跡全体の地形の変遷に主眼を置きながら、瓜破台地とその縁辺の地形の様相をみてみたい。なお、便宜上瓜破北遺跡を、阪神高速道路以西の範囲を西部、瓜破台地西縁辺を中央部、瓜破台地以東を東部にわけ、本調査地の所在する中央部を中心に述べる。第3図は、第2図のA-A'ラインの現況の地形図に、近辺の既往調査の柱状図を投影した対比図である（註1）。

瓜破台地は最終氷期に「古天野川」によって形成された扇状地が、浸食によって段丘化したもので、ベースとなる中位段丘層とその上位に薄く堆積する低位段丘層から構成される。周辺の原地形は、段丘構成層からなり、起伏に富んでいる。西部と中央部の間には大きな谷が存在し、その上面には旧石器時代の遺構・遺物がみられ、その谷の縁辺に当時の活動跡が確認されている。



第2図 調査地周辺 発掘調査地・遺跡分布、旧谷地形復元図 (番号は表1に対応する)

縄文時代になると、縄文海進によって、特に西部での埋積が進み、西部と中央部の間にみられる台地への傾斜変換点に存在したであろう谷は徐々に埋まっていく。中央部ではほとんど堆積はみられず、東部は縄文時代以前に谷底が浸食された西谷が埋没していった。

弥生時代前期から中期以前では西部のUR04-1次調査や中央部、東部のそれぞれの谷の縁部や台地上では堆積はみられないが、西部・東部にある谷内の埋積は更に進む。東部では西谷の埋没は弥生前期まで続いて落ち着き、東谷・馬池谷は中期以前に浸食を受けて埋没していく。その結果、東部では緩やかな起伏は残るものの、東部・西部の比高差は前時代 비해少なくなった。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての暗色帯は、層厚は薄いが、台地上の部分を除き広範囲に認められる。西部での土地利用が活発なのは、当時の地形が周辺に比べて高く、安定していたためと考えられる。西部から中央部では、縄文時代にかけて埋積した谷の影響を受け、一度UR80-3次調査付近以東で下がり、そのレベルから緩やかに本調査地(14020)まで、多少の起伏を形成しながら上がっていく。中央部は西部に比べ遺構の密度が薄く、あまり積極的に利用されていない。大阪府教育委員会が実施した平成23年度調査(11036)の調査ではこの時期の堆積層の土壌分析を行い、当時の植生は広葉樹を中心とした林であったが、ヨモギなど荒地に見られる植生へ変化したとの結果がでている(大阪府教育委員会2013)。中央部はこの頃から伐採等の開発の手が入り、土地利用が始まったと考えられる。また、東部は古墳前期の堆積は薄いが、中期以降、土砂の供給量が増え、谷の埋積が進んで堆積は厚くなる。東方の氾濫原の影響による自然堤防などの発達に伴うものであるが、氾濫原からやや奥まった位置にある西谷部分はあまり埋積しなかった。

飛鳥時代以降、平安時代にかけての古代の堆積は、台地の西側では西部に薄く堆積するのみで、中央部では確認されていないが、瓜破台地の東側では特に顕著にみられる。これは東除川を氾濫原とする土砂の供給が多いことだけでなく、飛鳥時代以降、人々の活動の中心が長原遺跡や瓜破遺跡の東南部に移っていることと一致する。東部では3つの谷の影響による高低差があるものの、層厚な堆積状況がみえ、土砂の供給と土地開発が盛んであったことが窺える。中世も同様の状況で、東部だけでなく、台地の西側でも堆積が活発である。地形としては、中央部では台地に向かってやや高くなるが、西部分では平坦な堆積となる。中世以降近世を通じて、原地形の影響を受けながらも耕作地として広範囲に利用されていくようである。

なお、台地上の堆積は盛土の下は近代現代耕土で部分的に近世耕土も非常に薄くみられるが、その直下は段丘構成層であり、近世に至るまで土地利用はみられないようである。

中央部に限れば、T.P.+4 m前後で段丘構成層をそれぞれの調査で確認している(註2)。UR07-2次より以西は、段丘構成層が西側に向かって下がり、台地は沖積地へ埋没する。本調査地以東は、東に向かって瓜破台地上がる前に、一旦落ち込む傾向が確認できた。これは本調査地14020の東端から、台地との間の変化点としての谷がある可能性を示唆している。また、本調査地のやや北側で実施された喜連瓜破駅以東でのボーリング調査の結果とも合致している(趙2001 p 9図3)。これは瓜破台地の西縁付近に拗曲が存在し、その隆起によって台地が形成された(趙2001・小倉2009)ことに起因するのであろう。この原地形の様相は台地の縁辺に立地することもあり、堆積状況の層厚の差こそあれ、前時代のトレースをするような堆積環境にあり、各時代、同じような地形を呈していたためと考えられる。古墳時代以

降の堆積は西部と似た状況であり、現在の地形でも瓜破台地の東から急傾斜してやや平坦面をなし、更に阪神高速道路に向かって傾斜する様相は、原地形の起伏と同じような傾向が窺える。

註1 作図に関しては大阪市文化財協会の『瓜破遺跡発掘調査報告Ⅷ』p 82～83の柱状対比図・投影図および『瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅲ』p 12の地層断面図を参考にしながら行い、第2図のA—A'ラインに合わせ現地地形など加筆修正している。本節は、遺跡全域にみられる弥生時代後期から古墳時代にかけての暗色帯を鍵層とし、個別の調査で得られた出土遺物の年代に基づいて対比を試みた。原地形と時代毎の地形の変遷を目的とするため、柱状図には地質等の表現はしていない。

註2 なお、第3図では平成23年度調査(11036)の調査の東端と本調査地14020の1区との間に、やや北方で下層確認をした4区の断面を参考に入れている。そのため層序が分断しているように見えるが、第1図にあるように実際は隣接しており、層序はつながりを見せる。また、4区と中央部の他の調査地点との間に層序の相対的相違がみられるのは、当地が北に向かって下がる地形であり、4区は必然的に標高が低いためである。

第2節 歴史的環境

瓜破北遺跡は旧石器時代から近世までの複合遺跡である。本調査地は瓜破北遺跡の中央部にあり、遺跡の東と南は瓜破遺跡に接する。遺跡の範囲は、瓜破遺跡とあわせて東西約2km、南北約1.6kmを測る。周辺には瓜破遺跡のほか、長原遺跡、喜連東遺跡、喜連西遺跡などが存在する。瓜破台地周辺の調査の詳細については数多くの報告書や論考が執筆されている。

なお、瓜破北遺跡の主な既往の調査については一覧表(表2)で示した。ここでは当遺跡の概要を中心に述べる。

旧石器時代 国府型ナイフ形石器や石器製作址と考えられる石器集中部が、UR07-2次やUR07-3次I区の調査や瓜破遺跡南西部のUR92-28次、80-4次で見つかっている(大阪市文化財協会2000・2009b・2009c)。UR07-3次I区では石器製作時に瀬戸内技法だけでなく石刃技法も同時に用いられていたことや、サヌカイトのほか、チャート・玉髄・凝灰岩など他地域から搬入された石材が豊富であったことが判っている。また、UR06-1次や11-1-2の調査で確認された石器集中部は、製作址とまでは認定できない石器の集中状況であったため、二次的に移動したと考えられている(大阪市文化財協会2009a、大阪府文化財センター2013)。これらは瓜破台地の西側の北に開く幾つかの開析谷の尖端で、微高地状に高まったところに存在する。この時期の遺物は瓜破台地全体に広がり、おそらく遺跡周辺は狩猟採集に適した環境であったことが窺える。

縄文時代 UR07-3次I区では縄文時代早期末から前期初頭の条痕土器が、同時期の石鏝や石器製作に伴う未成品と剥片とともに出土しており、被熱痕のある集石遺構が6基みついている。縄文時代も前時代から引き続き、キャンプサイトがあったと想定されている(大阪市文化財協会2009c・2009d)。UR04-1・3次、UR07-3次II区など谷の縁辺部での調査では、石器を製作し廃棄した石器集中部が確認

されている。また、UR04-3次、UR06-1次では前期前半の縄文土器とともにサヌカイト製の石器遺物のほか、黒曜石製の石鎌や剥片・接合資料が出土している（大阪市文化財協会2006・2009 a）。当該期の遺構は確認されていないが、瓜破北遺跡西部や瓜破遺跡南西部を中心に中期や晩期の土器の出土もみられる。東部でも早期末から晩期まで遺物の多少はあるものの、時代を通して活動が続いていたようである。

弥生時代 瓜破台地での活動が活発となり、大小さまざまな集落が形成される。瓜破北遺跡では、遺跡範囲の東部に位置するUR07-1次の調査で弥生時代前期の竪穴住居を検出し、近隣の11011や13007の調査でも同時期の遺構を確認している（大阪市文化財協会2009 d、大阪府教育委員会2013 b・2014）。弥生時代中期以降になると中心は西へと移動する。UR4・5・7・8次、辻本商店跡地、UR80-3次の調査で微高地の周辺を廻る、中期中葉から後葉の大溝を確認しているが、本格的な居住域の検出に至っていない（大阪市文化財協会2000）。

弥生時代後期～古墳時代前期 瓜破北遺跡の西部を中心に、多くの遺構・遺物が見つかり、やや場所を変えながらも連続と集落を営んでいたようである。後期中葉にはUR4次・5次・9次、UR80-3次、UR88-43次の調査区を含む範囲で居住域を検出し、14-1次3区の調査で後期の方形周溝墓を確認している。UR89-1次、UR04-2・3次、UR07-3次、11-1次1区・12-1次3区・14-1次1区の調査を含む微高地状の範囲には、弥生時代後期後半から庄内式期の居住域が広がる。UR04-2次では、庄内式期段階の墓域が確認されている。中期の大溝よりも南側には古墳時代前期の布留式期新相の居住域と墓域があり、UR80-2・3次、UR9次に広がっている。弥生時代後期中葉は微高地の南半に、布留式期新相は微高地の北半に広がり、時期によって微高地を転々と移動していたことが窺える（大阪市文化財協会2000・2006・2009 c、大阪府文化財センター2013・2014）。

また、瓜破北の集落の約1 km南方の瓜破遺跡西地区南半においても、弥生時代前期から後期まで続く集落があり、微高地上に形成されている。この時期の瓜破北遺跡の特徴は、中国鏡を持つ集落があったことにある。弥生時代後期中葉の居住域であるUR80-3次からは「未而思」と読める前漢の異体字銘帯鏡の破片が出土している。また、布留式期新相のUR80-2次とUR9次では懸垂のために2孔を開けた破砕した内行花文鏡と方格規矩鏡が方形周溝墓から出土している（大阪市文化財協会2000）。このことから瓜破北遺跡の集落は、複数の時期にわたり中国鏡を入手できた河内湖周辺の政治勢力を持つ首長との関係が深かったと考えられている。また、瓜破遺跡西地区では原位置を保つものではないが、貨泉2枚の出土が知られており（大阪市文化財協会1983）、瓜破北遺跡・瓜破遺跡西地区の集落が当該期の対外交渉と関連があったことが窺える。なお、遺跡の西方にある喜連西遺跡では弥生時代終末期の大型の墳丘墓を検出し、瓜破北遺跡との関係がある可能性がある（大阪市文化財協会2012）。

古墳時代中期～後期 瓜破北遺跡西部の集落が布留式期新相段階で断絶する一方で、中～後期の中心は瓜破遺跡北東部に移っていく。UR83-17・26次調査ではTK208形式の須臾器を伴う土壌内で竪穴建物の柱穴の可能性のある小穴2基が検出されており、西側のUR1次調査の成果と合わせて一帯に中期の集落が広がっていた可能性が指摘されている（大阪市文化財協会2000）。瓜破台地上にはゴマ堂山古墳や花

塚山古墳などが築造され、そこが長原古墳群から広がる古墳の西限となっている。瓜破北遺跡では東部の11011の調査で検出した西谷の肩から谷に入った斜面で、準構造船の部材が大量に出土し、二次利用のために解体した様相が窺える。西谷は第3図から見て取れるように、周囲に比べて下がっている。よって入り込んだ谷部分でも準構造船が入れるような水位のある湿地帯であった（大阪府教育委員会2013b）。しかし、全体的に古墳時代後期以降、瓜破北遺跡では東部域でやや活動がみられるものの、遺構・遺物が減少し、集落活動の中心は瓜破台地から瓜破遺跡の南東地区や喜速東遺跡や長原遺跡など、「西ムラ」と呼ばれる集落が瓜破台地の東方にある馬池谷の東側の自然堤防に沿って拡がり（大阪市文化財協会2013）、発展していくようである。

古代 飛鳥時代には遺跡西部で土器埋納土坑が2箇所報告されているのみで、集落に伴うと考えられる顕著な遺構は見つかっていない。奈良時代については遺跡北東部に成本廃寺と瓜破廃寺の推定地がある。瓜破廃寺は字鳶尾（現 瓜破霊園内）周辺で唐草文軒丸・軒平瓦が採集され、存在が推測されているが遺構は未確認で詳細は不明である。成本廃寺は、1976年（昭和51年）のUR1次調査で奈良～平安時代初期の飛雲文軒丸・軒平瓦が出土したことで周知された。この調査で検出された東西にのびる溝は同廃寺の南限を画すると考えられており、同廃寺の中心は現在の瓜破東小学校付近と推定されている。

中・近世 中世以降、近世を通じて本遺跡周辺では顕著な遺構は確認されておらず、耕作地が広がっていたとみられる。瓜破地区は近世には河内国丹北郡に属していた。当時の地割の復元に参考となる資料が、『瓜破遺跡』所収の「瓜破地区字限図」（第4図）である（註1）。

一般的に「字限図（あざきりず）」とは、1873年（明治6年）の地租改正条例に伴い政府によって全国規模で作成された字の測量地図のことである。近世の検地帳に記された字名一筆ごとを測量して作成されているので、近世の地割の情報も反映されているといえるが、この測量は誤差30分の1まで許容されていたので、精度については問題がある。

「瓜破地区字限図」の出典は明らかではないが、明治期の測量図をもとにして作成されていると考えられる。そしてこの図に見られる地割は、戦後すぐ米軍によって撮影された航空写真にも写っており、形状がほぼ残っていることがわかる。ただ、今回の調査地付近に関しては、第二次世界大戦末期に大阪金属工業大和川航空機製作所が建設され、元の地割は改変されている。戦後の土地区画整理においても、工場敷地の形状をそのまま踏襲したため、今なお周辺と異なる地割を呈している。この大和川航空機製作所については後述する。

国土地理院ホームページからダウンロードした1948年（昭和23年）2月撮影の米軍航空写真（USA-M18-1-123）に、主要道路や池、古墳の位置などを参考にして「瓜破地区字限図」に見られる地割をのせたものが第4図である。調査地付近の地割については、「ひらのくひやくねんし」所収の1928年（昭和3年）の航空写真を参照している（註2）。なお、戦後の土地区画整理事業、道の拡幅・付け替え工事等で、第4図に見られる地割は現在ほとんど姿を消している。

今回の調査地は、第4・9図の字「南免田」、「溝尻」地区に位置している。近世の遺構面で検出した溝36、溝38、溝40は島高に伴う水田であり、溝40の東肩は坪境になっていた。溝40に直交する畦畔58は、

字の筆界を示す遺構と考えられる（本文第3章第2節）。

今回の調査では近世以前に遡る地割遺構は確認されなかったが、西側約500mに位置するUR04-1次調査において、近世の坪境の下層に中世の溝や平安時代前期頃と推定される畦畔状の高まりが見つかることから、今後の調査で同様に古い時期の地割遺構が検出される可能性がある（註3）。

註1 （財）大阪市文化財協会1983『瓜破遺跡』

註2 平野区役所2002『ひらのくひゃくねんし』

註3 （財）大阪市文化財協会2006『瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅲ』

参考文献

大阪市文化財協会1980『瓜破北遺跡』

大阪市文化財協会1981『瓜破北遺跡Ⅱ』

大阪市文化財協会1983『瓜破遺跡』

大阪市文化財協会2000『瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告』

大阪市文化財協会2001『長原・瓜破遺跡発掘調査報告XVI』

大阪市文化財協会2006『瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅲ』

大阪市文化財協会2009『瓜破遺跡発掘調査報告Ⅴ』

大阪市文化財協会2011『瓜破遺跡発掘調査報告Ⅶ』

大阪市文化財協会2013『瓜破・住道矢田・矢田遺跡発掘調査報告書』

大阪市文化財協会2009『瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅳ』・『瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅴ』・『瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅵ』・『瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅶ』

大阪市文化財協会2011『瓜破遺跡発掘調査報告Ⅷ』

大阪市文化財協会2012『喜連西遺跡発掘調査報告』

大阪市文化財協会2013『長原遺跡発掘調査報告第26冊』

大阪府教育委員会2013『瓜破北遺跡』

小倉徹也2009『瓜破台地の地形と地質の概要』『三七西遺跡』（財）大阪府文化財センター

小倉徹也2014『大阪市南部、瓜破遺跡西側における河川氾濫と土地の形成』（公財）福島県文化振興財団遺跡調査部ホームページ 調査研究コラム

梶山彦太郎・市原実1986『大阪平野のおいたち』青木書店

趙哲済1983『瓜破・瓜破北遺跡の層序』『瓜破遺跡』（財）大阪市文化財協会

趙哲済2001『瓜破台地北東部の段丘について』『大阪市文化財協会 研究紀要』4

日下正義1991『古代景観の復元』中央公論社

平野区誌刊行委員会2005『平野区誌』

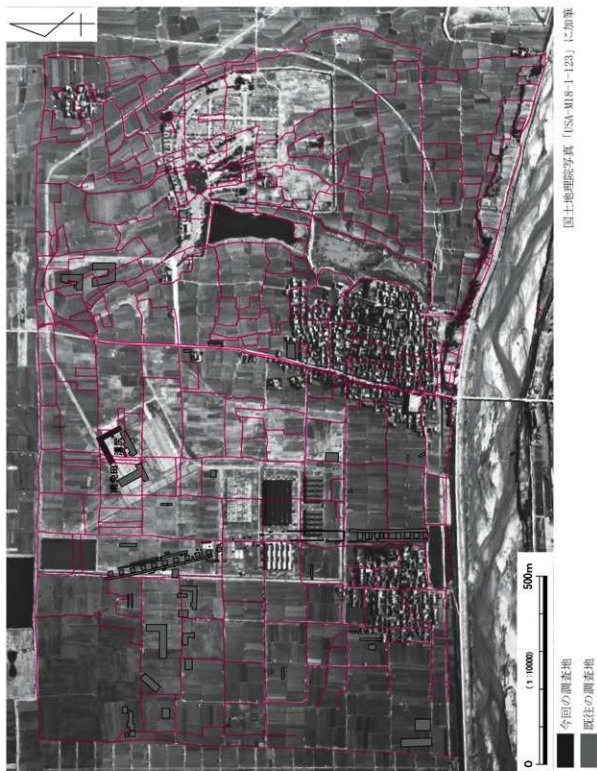
大阪府教育委員会2013『瓜破北遺跡』

大阪府教育委員会2014『瓜破北遺跡Ⅱ』

大阪府教育委員会2014『瓜破北遺跡Ⅲ』

大阪府文化財センター2013『瓜破北遺跡』

大阪府文化財センター2014『瓜破北遺跡（その3）現地公開資料』



第4図 戦後(昭和23年)航空写真に見られる地割

表1 調査地周辺発掘調査地

番号	調査略号	番号	調査略号	番号	調査略号	番号	調査略号	番号	調査略号	番号	調査略号
1	KR88-4	25	NG83-36	49	NG97-8	73	UR07-5・6	97	UR12-1	121	UR80-3
2	NG99-16	26	NG10-4	50	NG96-16	74	UR83-17・26	98	UR01-17	122	UR88-43
3	DD84-1	27	NG86-59	51	NG94-52	75	UR-1	99	UR87-17	123	UR81-5
4	KR09-1	28	NG84-12	52	N G 11-3	76	UR09-1	100	UR90-12	124	UR81-3
5	KR99-1	29	NG84-25A	53	NG97-18	77	UR91-1	101	UR88-6	125	辻本商店跡
6	KR00-1	30	NG84-25B	54	NG97-49	78	11011	102	UR85-30	126	UR90-13
7	KR91-3	31	NG85-21	55	NG89-67	79	UR07-1	103	UR05-1	127	UR91-3
8	KR92-3	32	NG90-66	56	NG89-43	80	UR89-26	104	UR10-1	128	UR89-1
9	KR92-7	33	NG84-29	57	NG90-46	81	UR82-22	105	UR11-1	129	14-1
10	KR92-5	34	NG83-32	58	NG90-49	82	UR-2	106	UR12-1	130	12-1-3
11	UR87-2	35	NG84-47	59	NG90-65	83	UR83-3	107	日本考古学協会調査地	131	11-1-1
12	KR93-4	36	NG83-57	60	NG90-24	84	UR97-6	108	今里幾次氏調査地	132	UR07-3
13	KR80-1	37	NG89-20	61	NG91-23	85	UR-3	109	山本博氏調査地	133	UR04-1
14	KR89-2	38	NG93-68	62	NG91-22	86	UR8-28	110	UR00-11	134	UR04-2
15	KR87-3	39	NG94-63	63	NG92-6	87	UR87-20	111	KR12-1	135	UR04-3
16	KR86-3	40	NG93-71	64	NG91-9	88	UR86-4	112	KR10-1	136	12-1-1
17	KR86-6	41	NG94-46	65	NG98-32・46	89	UR85-16	113	13007	137	12-1-2
18	KR94-8	42	NG94-3	66	NG84-24	90	UR85-16	114	11036	138	11-1-2
19	KR94-7	43	NG95-40	67	UR86-11	91	UR80-1	115	UR07-2	139	UR06-1
21	KR84-2	45	NG95-41	69	UR88-5	93	UR80-8	117	UR-4		
22	KR82-2	46	NG95-13	70	UR07-4	94	UR-6	118	UR-5		
23	NG86-91	47	NG96-32	71	UR00-8	95	UR92-28	119	UR-7		
24	NG96-47	48	NG93-34	72	UR91-14	96	UR93-2	120	UR80-2		

表2 瓜破北遺跡における主な既往の調査一覧

番号	調査主体	名称	調査名	調査年度	おもな遺跡・遺物	参考文献
117	市文協	UR-4		1976	弥生後期～古墳前期集落、大溝	1980「瓜破北遺跡」
118	市文協	UR-5		1976	弥生後期～古墳前期集落、大溝	1981「瓜破北遺跡Ⅱ」
125	市文協	辻本商店跡地		1977	弥生後期大溝	(未報告)
119	市文協	UR-7		1978	弥生後期大溝、小穴群	(未報告)
116	市文協	UR-8		1978	古墳前期方形周溝墓、土塚墓、大溝、中国鏡	1980「瓜破北遺跡」
120	市文協	UR80-2		1980	古墳時代前期方形周溝墓	2000「瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅲ」
121	市文協	UR80-3		1980	弥生時代後期・古墳時代前期集落、大溝、中国鏡	2000「瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅲ」
124	市文協	UR81-3		1981	太形船刃石斧、溝、小穴群	1983「瓜破遺跡」
123	市文協	UR81-5		1981	弥生時代の沼沢遺構	1983「瓜破遺跡」
122	市文協	UR88-43		1988	弥生時代後期～古墳前期集落、吉備型甕	2000「瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅲ」
128	市文協	UR89-1		1989	弥生時代後期～庄内期集落	2000「瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅲ」
126	市文協	UR90-13		1990	自然流路、深掘りによって段丘構成層を確認	2000「瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅲ」
127	市文協	UR91-3		1991	弥生中期石器製作址	2000「瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅲ」
133	市文協	UR04-1		2004	旧石器～縄文時代石器遺物、縄文石器製作址	2006「瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅲ」
134	市文協	UR04-2		2004	弥生後期後半～古墳前期集落、庄内方形周溝墓	2006「瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅲ」
135	市文協	UR04-3		2004	縄文流路・土器・石器、弥生後期後半集落	2006「瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅲ」
139	市文協	UR06-1		2006	縄文時代土器・石器遺物	2009「瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅳ」
115	市文協	UR07-2		2007	後期旧石器時代前半石器製作址	2009「瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅳ」
132	市文協	UR07-3		2007	旧石器製作址、縄文時代前期集落、弥生後期末集落	2009「瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅳ」
79	市文協	UR07-1		2007	西谷、弥生時代前期末～中期集落、古墳時代初頭溝	2009「瓜破遺跡発掘調査報告Ⅴ」
78	府教委	11011		2011	弥生後期後半～古墳時代初頭(庄内)溝、古墳時代西谷貝部と準構造船形墓	2013「瓜破北遺跡Ⅱ」
114	府教委	11036		2011	古墳時代前期溝・土坑・小穴、近世瓦壇	2013「瓜破北遺跡」
131	府センター	11-1		2011	中世耕作法・土坑、弥生後期～古墳時代前期後半集落、旧石器石器製作址の廃棄土坑	2013「瓜破北遺跡」
130 136 137	府センター	12-1		2012	中世耕作法、古代土器埋納坑、古墳時代前期後半集落	2013「瓜破北遺跡」
113	府教委	13007		2013	弥生時代前期～古墳時代(庄内)の土坑・ピット群	2013「瓜破北遺跡Ⅱ」
129	府センター	14-1		2014	弥生時代中期末溝、弥生時代後期後半方形周溝墓、古墳時代前期(布留)の土坑・溝	(公財)大阪府文化財センター2014「瓜破北遺跡(その3)現地公開資料」

※市文協は(財)大阪府文化財協会、府教委は大阪府教育委員会、府センターは(公財)大阪府文化財センターを示す。

※表は大阪府文化財協会2009「瓜破北遺跡発掘調査報告Ⅴ」を一部加筆・改変して作成している。

第3章 調査成果

第1節 基本層序（第5～8図・図版1～4）

今回の調査地は瓜破台地が標高を落としながら北に延びていき、同時に緩やかに東に下がっていく場所にある。調査区1～4区に於いて大きく5層に分層した。以下に各層の詳細を記述する。

第0層（盛土） 近、現代以降の土層である。標高はT.P.+7.0m程度であった。4層に細分される。

0-1層 府営住宅建設時の盛土である。標高はT.P.+7.0m程度で層厚は160cmを測る。

0-2層 府営住宅建設前の戦後の耕作土である。標高はT.P.+5.6m程度で層厚は14cmを測る。土色は褐灰(10YR5/1)色で土質は細砂が混入する粘質土であった。

0-3層 終戦直前に稼働していた大阪金属工業大和川航空機製作所を建設した際の盛土である。標高はT.P.+5.5m程度で層厚は20cmを測る。土色は黒(N2/)色と明青灰(5B7/1)色の混合で土質は粘土～シルトであった。この土は下層確認トレンチで確認された6～8層の土が上方より運ばれてきたものだと考えられる。

0-4層 作土層である。標高はT.P.+5.4m程度で層厚は20cmを測る。土色は暗青灰(5PB4/1)色で土質は細砂少量混じる粘質土であった。近、現代の遺物を包含していた。4区ではこの層の下で南北に伸びる烏凧の跡を検出した（第0面）。

第1層 近、現代の耕作土を除去すると現れる層で、第1層上面の標高は、1区南端ではT.P.+5.5mだが、3区北端ではT.P.+5.3mまで下がり、約30cmの比高差を確認した。平成23年度の調査（調査番号11036）の第IV層に対応する。3層に細分される。

1-1層 作土層である。調査区全面で検出される層である。層厚は最大14cm前後を測る。土色は灰オリーブ(7.5YR5/2)色で土質は細砂を含む粘質土であった。土師器片、瓦器片、陶器片、磁器片など、近世を下限とする遺物を包含していた。

1-2層 1-1層に対する床土である。調査区全面で検出される層である。層厚は最大20cm前後を測る。層間に水平方向の鉄分の沈着を挟んで2層に細分できる箇所がある。土色はオリーブ灰(2.5GY6/1)色で、土質は細砂を微量含んだ粘質土であった。須恵器片、土師器片、瓦、瓦器片、陶器片、磁器片など、近世を下限とする遺物を包含していた。

1-3層 作土層である。調査区全面で検出される層である。層厚は最大25cm前後を測る。1～3区では上下に細分される場所がある。上層の土色は青灰(5PB6/1)色で、土質は小礫を少量含む粘質土であった。下層の土色は灰白(2.5Y7/1)色で土質は細微砂を含む粘質土であった。須恵器片、須恵質土器、土師器、瓦、瓦器片、陶器片、磁器片など、近世を下限とする遺物を包含していた。この層の上面で東西に伸びる畦畔を検出した。（第10図）

第2層 上面が第1面である。第1層を除去すると現れる層で、平成23年度の調査（調査番号11036）のV層に対応する。第2層上面の標高は、1区南端ではT.P.+5.2mだが、3区北端ではT.P.+4.9mまで下がり、約30cmの比高差を確認した。3層に細分される。

2-1層 作土層である。調査区全面で検出される層である。層厚は最大30cm前後を測る。2層に細分できる場所があり、上層の土色は黄灰(2.5Y5/1)色で、土質は細微砂、Fe、Mnを含んだ粘土であった。下層の土色は青灰(5PB6/1)色で、土質は細礫、Me、Feを含んだ粘土であった。須恵器片、土師器片、軒丸瓦、瓦器片、陶器片など中世を下限とする遺物を包含していた。

2-2層 水成層である。砂、礫などの氾濫堆積物で構成される。調査区全体には現れず、流路の跡のみに堆積している。層厚は最大100cmを測る。場所により多少の土色の違いがあるが、概ね明褐(7.5YR5/8)色で、土質は砂である層と、灰(N6/)色で、土質が粘土である層の互層であった。須恵器片、土師器片、瓦器片、陶器片など、中世を下限とする遺物を包含していた。最下部から多くの木片、未製品の木製品が出土した。

2-3層 水成層である。主に2-2層の下に現れる層で、流路の最下層と思われる。層厚は1区、2区、3区北側までは概ね8cm程度であるが、3区北側、4区などでは、広範囲に厚く堆積しており最大48cmを測る場所もある。土色は灰(N4/)色で、土質は粘土～シルトであった。須恵器片、土師器片、弥生土器片など、奈良時代を下限とする遺物を包含しており、奈良時代に埋没していたと考えられる。

第3層 上面が第2面である。水成層が土壌化し、黒色を帯びた層で、上部に炭化物を多く含む場所がある。瓜破遺跡に押し並べて検出される地層である。平成23年度の調査(調査番号11036)の第Ⅶ層に対応する。1区南端ではT.P.+4.9mだが、3区北端ではT.P.+4.6mまで下がり、約30cmの比高差を確認した。層厚は最大20cmを測る。土色は黒(10YR2/1)色で、土質はラミナを含む粘土層であった。布留式期土器片、庄内式期土器片、弥生土器片、縄文土器片、サヌカイトなどが出土しており、弥生後期～古墳前期の包含層と思われる。

第4層 上面が第3面である。水成層である。本調査に於けるベース層である。平成23年度の調査(調査番号11036)の第Ⅷ層に対応する。1区南端ではT.P.+4.8mだが、3区北端ではT.P.+4.5mまで下がり、約30cmの比高差を確認した。層厚は20cmを測る。土色は灰(10Y5/1)色で、土質はシルトであった。

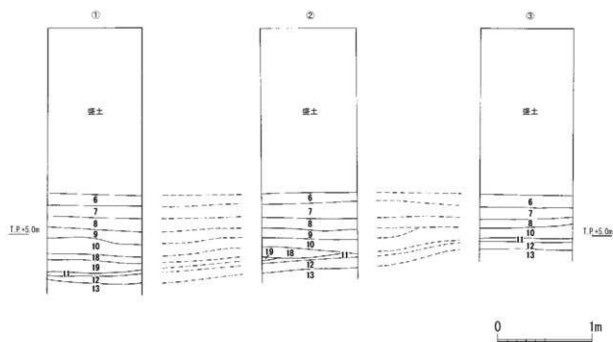
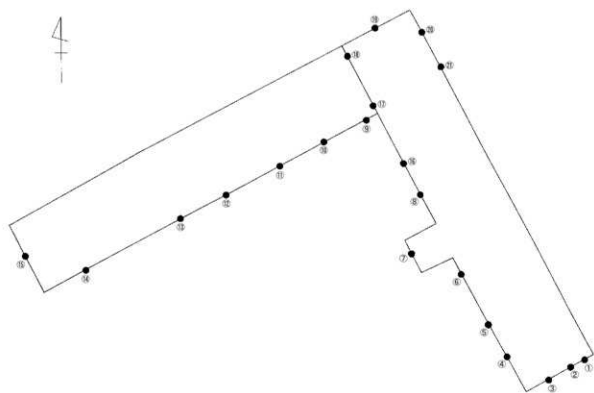
第4層以下 3面上面調査終了後、下層確認トレンチをT.P.+3.6mまで掘削した。その際、5～7層を確認した。以下にその内容を記す。(図版13)

第5層 水成層である。標高はトレンチ東端ではT.P.+4.04m、西端ではT.P.+3.98mを測る。層厚は26cm程度である。土色はオリーブ灰(5GY6/1)色、土質はシルト～微砂であった。

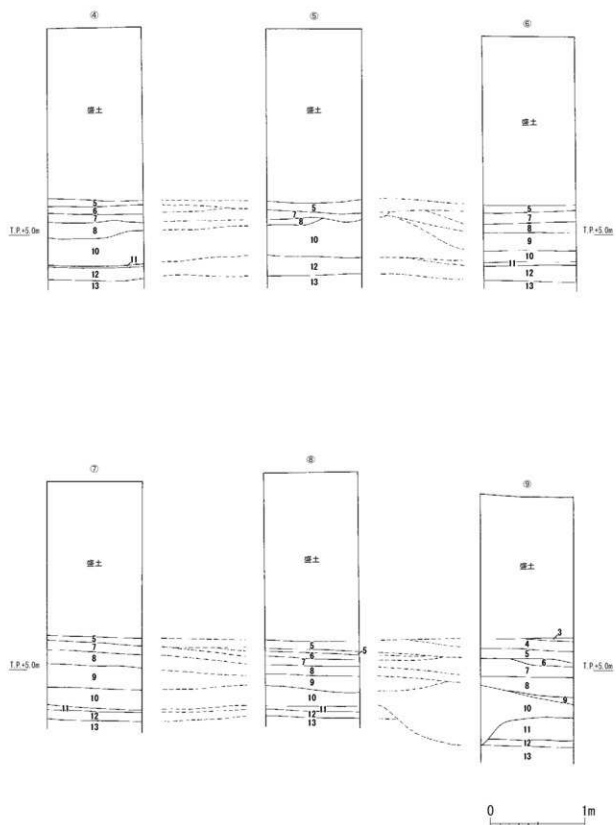
第6層 水成層が土壌化して黒色を帯びた層である。標高はトレンチ東端ではT.P.+3.82m、西端ではT.P.+3.9mを測る。層厚は22cm程度である。土色は黒(N2/)色、土質は粘土であった。

第7層 水成層である。標高はトレンチ東端ではT.P.+3.6m以下になる為不明、西端ではT.P.+3.68mを測る。層厚は10cm以上である。土色は灰(N4/)色と灰(N3/)色の混合色で、土質は粘土であった。

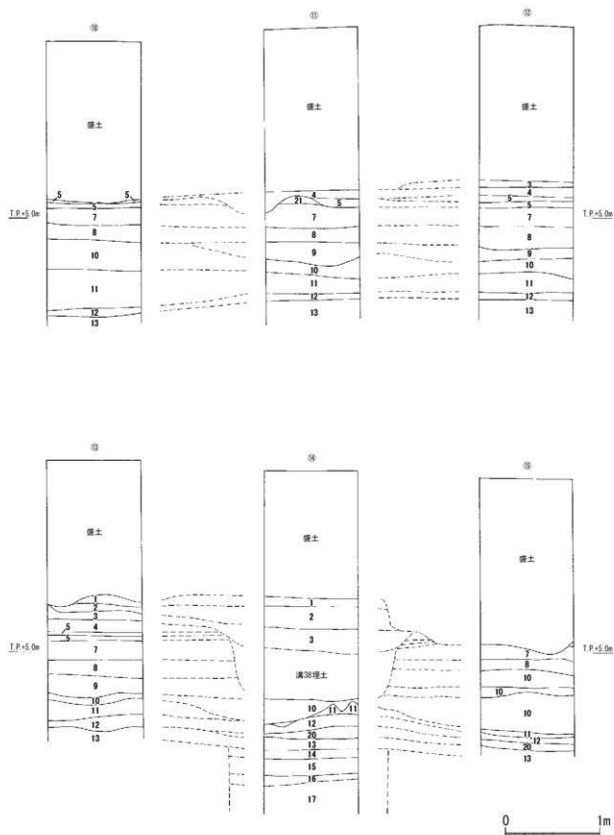
第8層 水成層である。標高はトレンチ東端ではT.P.+3.6m以下になる為不明、西端ではT.P.+3.62mを測る。層厚は6cm以上である。土色は明青灰(5B7/1)色で、土質は細砂を含むシルト質粘土であった。



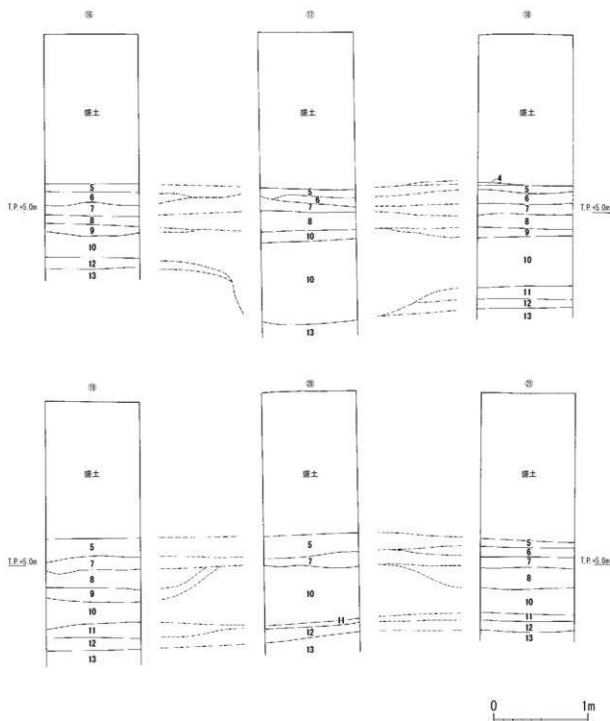
第5図 土層断面柱状図 No 1



第6図 土層断面柱状図 No2



第7図 土層断面柱状図 No 3



- | | |
|---|--|
| <p>0 壤土 (0-1層)
 1 褐灰 (10YR5/1) 色粘質土に細砂混入 (0-2層)
 2 黄 (N2/) 色粘土-シルトと明黄灰 (5B7/1) 色粘土-シルトの混合土 (0-3層)
 3 暗黄灰 (5PB4/1) 色粘質土に細砂少量混入 (0-4層)
 4 灰オリーブ (7.5YR5/2) 色粘質土に細砂混入 (1-1層)
 5 オリーブ灰 (2.50Y6/1) 色粘質土に細砂微量混入 (1-2層)
 6 黄灰 (5PB6/1) 色粘質土に少量少量混入 (1-3上層)
 7 灰白 (2.5Y7/1) 色粘質土に細砂少量混入 (1-3下層)
 8 黄灰 (2.5Y5/1) 色粘土に細砂、Fe、Mn混入 (2-1下層)
 9 黄灰 (5PB6/1) 色粘質土に細砂、Fe、Mn混入 (2-1下層)
 10 明褐 (7.5YR5/3) 色砂と、灰 (N6/) 色粘土の互層 (2-2層)</p> | <p>11 灰 (N4/) 色粘土-シルト (2-3層)
 12 黄 (10YR2/1) 色粘質土に微砂のラミナ混入 (3層)
 13 灰 (10YR5/1) シルト (4層)
 14 オリーブ灰 (50Y6/1) 色シルト-微砂 (5層)
 15 黄 (N2/) 色粘土 (6層)
 16 灰 (N4/) 色粘土と灰 (N3/) 色粘土の混合土 (7層)
 17 明黄灰 (5B7/1) 色シルト質粘土に微砂混入 (8層)
 18 灰 (N6/) 色粘土に細砂混入
 19 灰 (N6/) 色粘土
 20 灰 (N4/) 色粘質シルトに微砂少量混入
 21 7に灰 (10Y6/1) 色シルトに微砂少量混入</p> |
|---|--|

第8図 土層断面柱状図 No 4

第2節 遺構と遺物

第1項 第0面（4区）（第9～16図・図版5・6）

今次調査では、中世遺構面である第1面（基本層序第2層上面）を調査の起点としており、近世耕作層である第1層は、断面観察記録と遺物採集とに止めて掘削し、平面調査は剖愛する方針であった。1～3区はこの方針で進めたが、4区については、機械掘削終了段階から近世条里型水田と見られる地割痕跡が比較的明瞭に検出されたため、追加的に第0面を設定し、平面調査を実施した。

第0面は基本層序第1層上面に相当する。標高はT.P.+5.3m前後を測る。1-1層を作土、1-2層を床土（鍋床層）とする近世水田遺構と、島高と見られる耕作関連遺構とによって構成される。基盤層は1-3層である。調査では、攪乱の影響と0-4層の削平とにより残存状態の不良な1-1層を除去し、1-2層上面およびその相当面で遺構検出を行った。

検出遺構は西から、溝36、高まり58、溝38、高まり57、溝39、溝40、畦畔56と水田遺構である。第12図はその完掘状況を示す。

「瓜破地区字限図」（以下「字限図」・前出）によれば、4区は、字「南免田」と字「溝尻」との境界に立地する。両者は坪境によって東西に画されており、「南免田」は南北方向の長地型、「溝尻」は東西方向の半折型地割で表記されている。

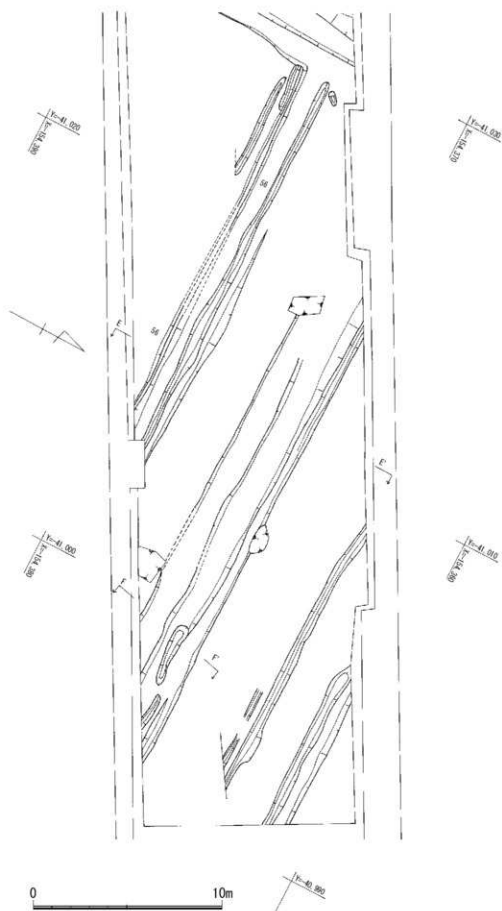
第9図では、溝40の東肩付近を境として地割の方向に変化が認められる。西側では、南北方向の溝と高まりとがほぼ等間隔で並行しているのに対し、東側では、これに直交する東西方向の畦畔と水田区画が広がっている。この地割の変換線がすなわち坪境であると考えられることから、第12図の遺構配置は「字限図」所載の地割とほぼ合致していると判断できる（第9図）。

ところで、字限図は明治6年（1873年）の地租改正条例の施行を受け、明治14年にかけての現地測量に基づいて作成された後代の資料である。調査所見では、近代以降の耕作層は基本層序0-4層であると考えている。従って、「字限図」の測量は0-4層上面について行われた可能性が高いが、それでいて「字限図」と第12図の地割が合致するのは偶然の結果ではなく、地割の踏襲に起因すると考えられる。

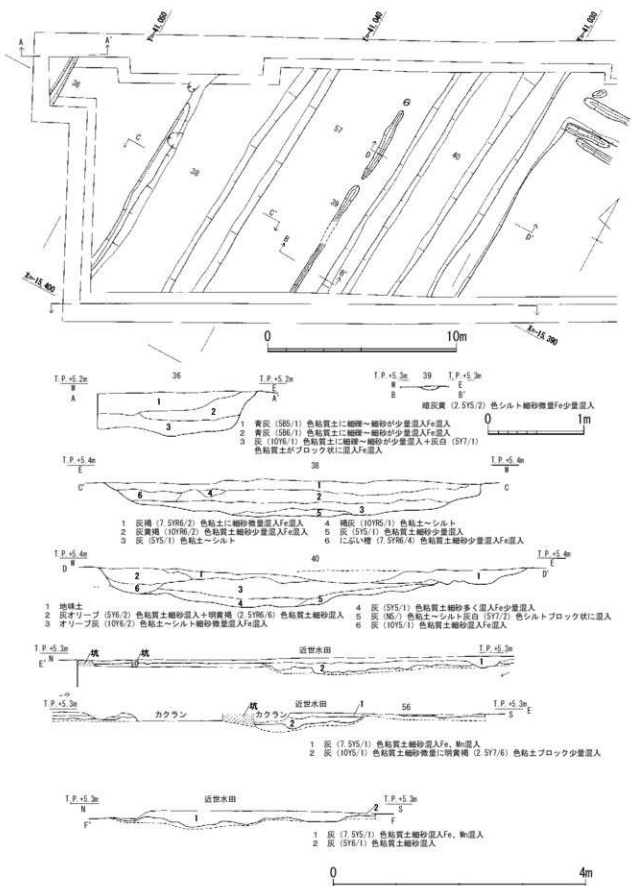
これは、字限図が近世の検地帳と対照可能であったことから推測されるだけでなく、断面観察によっても確認できる。



第9図 「瓜破地区字限図」と4区遺構配置図



第10図 第O面東半 遺構平面図



第11図 第0面西半 遺構平面図・断面図

第11図は調査区南壁および西壁断面から溝40以西を抜粋したものである。第0面は0-4層の下面に該当するが、図からは、0-4層が第0面の凹凸をほぼ忠実になぞっていることが読み取れる。これは地割を踏襲していることを示している。また、昭和3年に撮影された航空写真(註1)から判読できる地割も「字限図」と大差はないように見える。0-4層は昭和19年の大阪金属工業大和川航空機製作所建設に伴う整地土によって埋め立てられるまで耕作層として存続する。調査区周辺の地割に変化が生じるのはそれ以後のことであり、それまでは近世以来の地割がほぼ踏襲されていたと考えられる。

以上の理解に基づき、第0面の検出遺構を検討する際には、「字限図」や航空写真等の後代の資料も参考にした。地割の踏襲が坪境や字界のみならず、筆界についても適用できるかどうかは個々の検討を要するが、前述の第12図と「字限図」との対照に関する限り、同様の土地利用が継続していると判断して差し支えないと思われる。

遺構

畦畔56と水田遺構(第10図)

坪境東側是水田遺構である。地割は基本層序1-3層上面に設定されている。作土は基本層序1-1層で、水田面の標高はT.P.+5.3mを測る。断面図の1は床土で、その上面には東西方向の夥しい鋤溝が認められた。波佐見焼の染付碗底部が出土している(第17図9・図版14)。畦畔56北肩から北側の範囲では、床土の下に複数の溝状の掘り込みが確認された(第10・11図)。深さは0.1-0.2mの範囲で起伏がある。

畦畔56は調査区中央付近で検出された。幅約0.3mを測る。1-3層を構築面とし、細粒砂混じり粘質土を盛り上げて嵩上げしている。構築面からの残存高は約0.1mを測る。この畦畔は字「溝尻」内の筆界と考えられる。

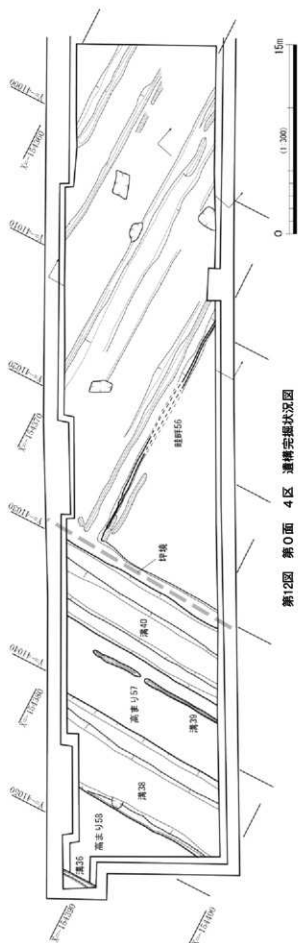
坪境西側の溝36、38、40は、調査段階ではそれぞれ独立の溝と認識していたが、埋土に流水または滞水痕跡を示す堆積構造が見られないことや、規模や条数が可耕地の浪費としか思われなほど過大なことなど、疑問点が少なくなかった。その後の検討により、これらが水田区画であること、また、高まり57、58を含めた複合的な性格の遺構であることが想定された。可能性として最も適合するのは鳥島であり、ここでは鳥島であることを前提に記述を進めたい。

以下、各遺構の調査所見を述べた後、鳥島としての全体像について検証する。なお、呼称は便宜上、調査時のままとする。3条の溝に関しては、方向、規模から埋土とその層序に至るまで酷似しており、重複する内容が多いため、溝40の項目に集約し、溝36、38の項目には40との対応関係のみを示すこととしたい。

溝40と坪境(第11、12図・図版5・6)

坪境は上述のように、溝40の東肩付近、地割変換線上に推定されるが、平面上では検出できなかった。南壁断面上に、1-3層を削り出した畦畔状の高まりが認められるものの、攪乱による破壊とともに、0-4層による削平を受けていると見られ、規模は不明である。残存幅は0.4mを測る。

溝40は調査区西半部で検出された。基本層序1-3層上面を掘削面とし最深部は2-2層に達する。方向は南北を指すが、真北に対して東へ2-3度の偏りがある。これは近世条里全体の傾きに合致する。



第12図 第0面 4区 遺構完備状況図

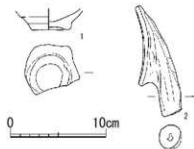


第13図 第0面 4区 島島断面図

※ 相模川河原において遺物は次第の上層を占す。塚山断面が遺構に現して混交してないため、大森の相模川河原より下を北(東側より)上まで同一層位の位置が異なる。0内の相模川河原を示す。

幅約6m、深さ約0.6mを測る。断面形状は二段落ちを呈し、底面はほぼ平坦である。埋土は6層に分けられる。1は基本層序0-4層と同一層準の近・現代作土である。溝廃絶後の窪みを充填するとともに、耕作活動により下位層を削平している。溝36の1、溝38の1についても同様の状況が観察できる。2・6は3の堆積後に再掘削された幅約1.5m、深さ0.4mの溝の埋土である。溝は高まり57との境界に位置しており、ほぼ垂直に近い角度で掘削されている。その際、57の東肩もほぼ垂直な法面に加工されている。溝36の2、溝38の6も同様の溝の埋土であり、それらに隣接する高まり58の西肩、57の西肩も同様に加工されている。さらに、検出はできなかったが、高まり58の東肩も垂直の断面形状を示しており、ここにも溝が掘られていた可能性が高い。これらに対し、溝40の東肩には痕跡がないことから、この溝は、高まりの縁辺部を再掘削することに主眼を置いているものと推定される。埋土の2は砂を多量に含む粘質土に、明黄褐色の粘質土ブロックが混入する混合土で、人為的な埋立土と思われる。埋土6は不明瞭ながら滞水層とも見え、この溝が一定期間機能していた可能性を示している。出土遺物は近世陶磁器の細片である。3～5は溝40の機能層である。いずれも淘汰不良の細粒砂混じり粘質土で構成される。3は二段落ちの上位を充填するシルト～粘土主体の粘質土で、細粒砂が混入する。上面は0-4層により削平されている。細粒砂の混入状況から人為的な攪拌を受けていると見られ、作土の可能性が高い。溝36の3、溝38の2に対比できる。上面の標高は約T.P.+5mを測る。

4・5は二段落ちの下段を充填する細粒砂を多量混入する粘質土である。グライ化による灰色を呈する。1-3層起源と見られる細かいシルトブロックが混入しており、作土または埋立土の可能性もある。溝38の3・5に対応する。いずれの埋土からも水成堆積を窺わせる堆積構造は観察できず、流水および滞水の痕跡は認められなかった。このことは溝40が実質的に溝として機能していなかったことを示している。また、埋土の3は水田作土と考えられるため、溝40は1筆の水田区画である可能性が高く、その一部が溝状に検出されたものと再解釈された。そして、高まり57との関連からは、これらが水田と微高な島地との組み合わせからなる、島高であると判断した。溝36、38の性格も同様と考えられる。3～5層は一括して掘削した。出土遺物は、唐津焼碗底部(1)、三足羽釜脚部(2)のほか、須恵器、瓦器、瓦、近世陶磁器等の細片がある。



第14図 第0面 4区 溝40出土遺物

溝36(第11、12図)

調査区北西角において、東肩を含む一部が検出された。検出範囲での幅は約1.5m、深さ約0.4mを測る。溝40に並行する。検出範囲が限られているため未確認ではあるが、溝40および溝38と同規模のものと推定される。埋土は3層に分けられる。1は溝40の1に対応する2は溝40の2に対応する。遺物は出土していない。3は溝40の3に対応する。遺物は出土していない。

溝38(第11、12図)

調査区西半部で検出された。基本層序1-3層上面を掘削面とし、最深部は2-2層に達する。溝40に並行する。幅約6m、深さ約0.6mを測る。断面形状は二段落ちを呈し、埋土は6層に分けられる。1は溝40の1に対応する。4はその耕作関連溝と考えられる。6は溝40の2に対応する。2・3・5は溝

40の3・4・5に対応する。2以下は一括して掘削した。出土遺物は須恵器、瓦器、瓦、近世陶磁器の細片である。

高まり57と溝39(第11、12図)

高まり57は調査区西半部で検出された。溝38と40との間に位置する。幅約5mを測る。1-3層を構築面とし、細粒砂を多量混入するシルトで嵩上げをしている。構築面からの高さは約0.2mで、その標高は約T.P.+5.4mを測る。上部は基本層序0-4層に削平されている。溝40の項目でも述べたように、島畠と考えられる。

溝39は高まり57上で検出された。幅約0.2m、深さ約0.04mを測る。埋土は1層で、細粒砂を多量含む粘質土である。出土遺物は土師器細片である。島畠の耕作に関連する溝状遺構と考えられる。

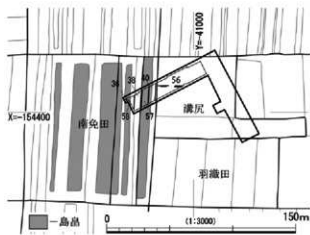
高まり58(第11、12図)

調査区西半部で検出された。溝36と38との間に位置する。幅約6mを測る。1-3層を構築面とし、細粒砂を多量混入するシルトで嵩上げをしている。構築面からの高さは約0.2mで、その標高は約T.P.+5.2mを測る。上部は基本層序0-4層に削平されていると見られる。高まり57と同様、島畠と考えられる。

島畠

以上を整理すると、坪境の西側では、1-3層を掘り下げて一段低い水田とし、掘り残した部分に残土を積み上げて畑地とする形態の島畠が営まれていたと推定される。復元予想では、水田面の標高は約T.P.+5m、島畠上面は削平されているので不明であるが、残存高の5.4mを大きく超えることはないと考えられる。

「瓜破地区字限図」を参照すると、溝40と高まり57の該当部分では、太字で表した長地型地割内をL字形の線で分割するような表現がなされている(第9図)。これは長方形の島畠の東辺と南辺を、L字形の水田が囲んでいる様子を示している。また、溝38、36と高まり58の該当部分では、島畠の四周が水田によって圍繞されている。このような表現は明治期に作成された地籍図において認められ、若江郡若江南村(現東大阪市)の例では、同時期の土地台帳との照合によって、一方が畑で、他方が田から成る半田(島畠)であることが確認されている(浮田1961)。「字限図」を判読すれば、字「南免田」は8筆の田と6筆の畑から成り、東側の坪境から西へ向かって、田、畑、田、田、畑、田……の順序で並んでいる。これは溝40、高まり57、溝38、高まり58、溝36の検出状況に対応しており、溝38を2筆分の田と勘定しなければならぬことを除けば、ここでも遺構配置と「字限図」はほぼ合致していると理解できる。とすれば、今回検出された島畠は、1筆あたり東西幅5~6m、南北幅100mに近い規模を有していたことが推定される。



第15図 島畠復元予想図

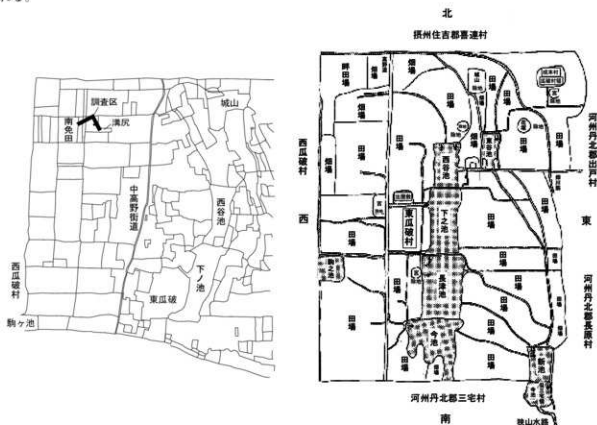
貞享5年(1688年)の「東瓜破村下絵図」(以下

「絵図」(註2)にも、島島に関する記述が見られる。「絵図」には、街道、集落、溜池、水路(井路)のほか耕作地が示され、耕作地には地目が記入されている。地目は田場、畑場、畔田場の3種類である。これを「瓜破地区字限図」と対照すると、字「溝尻」「南免田」は畑場ないし畔田場に該当すると判読できる。このうち畔田場は、島島を意味すると考えられる(註3)。「絵図」によると、瓜破台地に近い標高の高い地域には田場が、北西斜面を下って標高の低くなる低湿地には畑場、畔田場が分布している。宝永元年(1704年)の大和川付け替え以前、東瓜破村領内の灌漑用水は狭山池から井路を通じて供給されていた。用水は時間を定めて配水されており、村内下流域の田地まで充分に行き渡らなかったと言われている(註4)。このため、用水に乏しい低湿地を畑場、畔田場として活用したと考えられる。特に畔田場は、一方で地下げによって地下水を得ることで一毛作の水田とし、他方で盛土によって高燥な畑地とする島島の一形態であったと考えられる。

小結

4区第0面遺構は、基本層序1-3層を基盤として設定された条里遺構である。1-3層もおそらく近世水田作土と考えられるが、地割の痕跡は検出されておらず、第0面遺構がその地割を踏襲しているかどうか不明である。

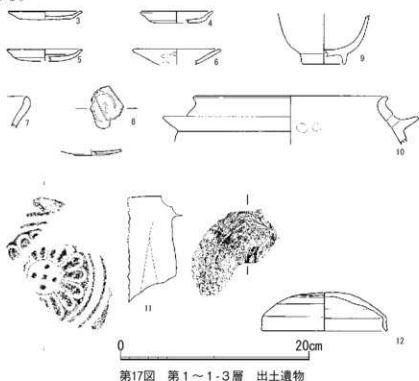
第0面遺構の具体的な開始時期を出土遺物から判断するのは難しいが、「絵図」の畔田場が「南免田」の島島を指している可能性は高いと見られることから、少なくとも17世紀後半頃には遡るものと考えられる。



第16図 東瓜破村下絵図

第1層出土遺物 (第17図・図版14、18)

土師質小皿(3、4、6)、瓦器小皿(5)、東播系すり鉢口縁部(7)、瓦器碗底部(8)、染付碗(9)、土師質羽釜(10)、須恵器杯蓋(12)、軒丸瓦(11)が出土した。(11、12)を除き、他の遺物はすべて14世紀以降に比定される。(9)は外面に細目紋を施す波佐見焼きで17世紀に属する。(8)の高台は貼り付けられ、かなり低くなっている。内面には直線と渦巻き紋らしきものが観察される。(11)は複弁八葉蓮華紋軒丸瓦で、外区に圈線が2条巡る。瓦当裏面には布目が観察される。製作は成形台一本作りである。長岡京7228型式のA種、平安時代初期に属するものだと考えられる(大阪市文化財協会2011『瓜破遺跡発掘調査報告書Ⅶ』)にもおそらく同紋で同様の製作技法で製作されている瓦(P61第45図131)が報告されている。(3)と(6)の色調はほぼ同じで灰白色を呈し、胎土中にわずかにチャートを含み、焼成は良好である。(5)の色調は橙色を呈し、胎土中に長石・チャートを含み、焼成は良好である。(10)の色調は淡黄色を呈し、胎土中にチャート・長石・クサリ礫を含み、焼成は良好である。(11・12)は混入品である。



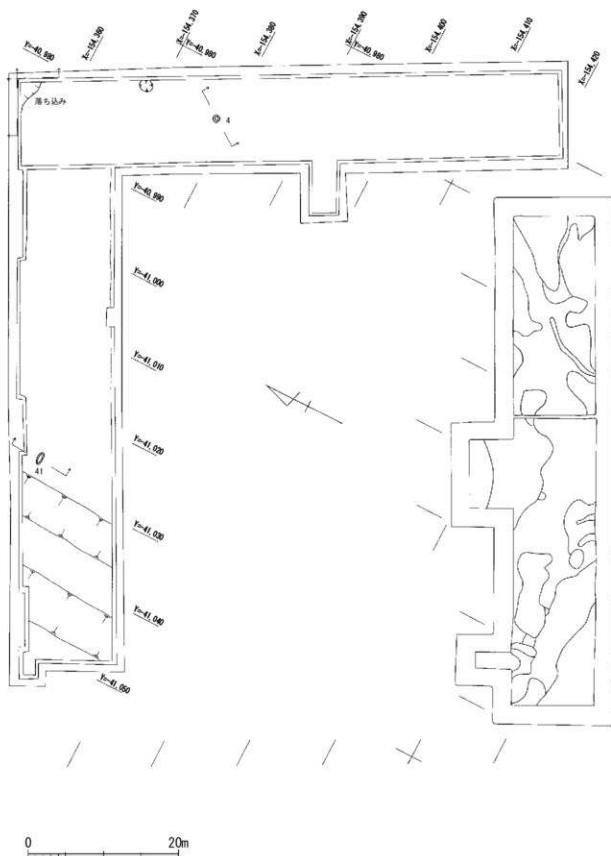
第17図 第1～1-3層 出土遺物

註1 平野区役所 2002『ひらのくひゃくねんじ』所載。

註2 財団法人大阪市文化財協会 2003『長原・瓜破遺跡発掘調査報告 X X』図49を転載。

註3 畔田]は一般的な呼称ではないが、字義通りに解せば、畔の上に作った田と理解できる。畔は「くろ」とも読む。浮田1961によれば、「一般に田の土を掻き揚げて高くした部分のことを、よく「ぐろ」「くろ」といい、大和の旧築山村(現大和高田市)の享和2年明細帳には、田は水場なので、上げ田に掘り上げ、「ぐ論」にして締作を行なったという記載がある。また農家の覚書の類にもよく「ぐろ」「ぐろ田」という耕地の呼び名があらわれる。「ぐろ」は「論」「籠」と書くが、籠の文字は12世紀末の荘園の検注状にも見られる」とあり、半田(高島)と同義としている。高島は地域によって呼称が異なり、「半田」、「掻揚田」、「高田」など様々であるが、「田」は必ずしも水田を意味せず、多くの場合は畑、特に綿花畑を指す。

註4 財団法人大阪市文化財協会 2003『長原・瓜破遺跡発掘調査報告 X X』p64-65



第18図 第1面 遺構平面図

第2項 第1面 (第18~20図)

遺構

第2層を基盤層とする遺構面である。基本は作土層であるが、明確な畦畔は削平されており平面でも断面でも確認できなかった。遺物の出土量は少ないが様々な時期の遺物が検出された。おそらく縄文時代から古墳時代にかけていく筋もの流路が走り、このあたり一体は河川の氾濫を繰り返していたようである。古墳時代以降、河川の氾濫が少なくなり、土壌化したところを耕作に利用したものと考えられる。安定して耕作できたのはおそらく中世以降であろう。

遺構はピット2基と3区の北東隅で北側に落ちていく落ち込みを検出した。2基のピットはいずれも単体で検出され、建物を構成するピットではなかった。

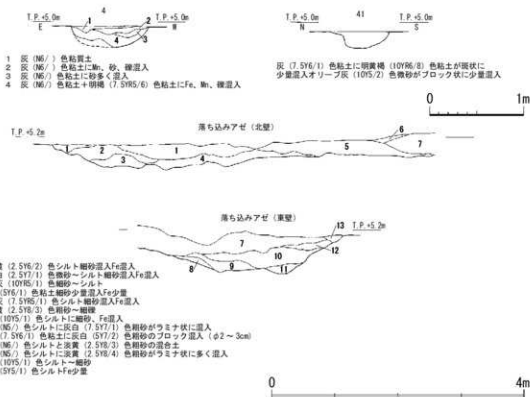
土坑4 平面形は不整形を呈し、最長軸約160cm、最短軸70cmである。深さは約20cm、埋土は一層である。灰色を呈する粘土を基本とする。そこに明黄褐色粘土粒が混ざり、オリブ灰色微砂～砂混り粘土をブロックで含む。

土坑41 平面形は隅丸方形を呈し、長軸約100cm、短軸80cmである。深さは約20cm、埋土は四層に細分された。

落ち込み 落ち込みの埋土はFe含シルト層を基本とし、下層で確認された流路の最終堆積だと考えられる。下層から陶器の底部(13)が出土した。



第19図 第1面 落ち込み 出土遺物

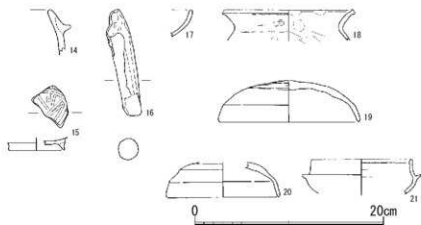


第20図 第1面 遺構断面図

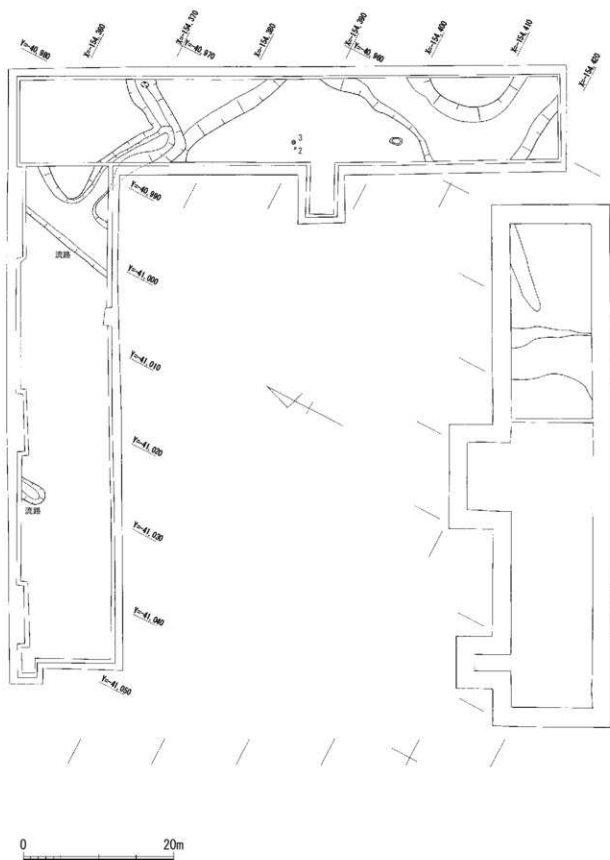
2層1～3出土遺物 (第21図・図版15、20)

瓦質羽釜 (14)、瓦器碗底部 (15)、瓦質三足脚部 (16)、土師器杯 (17)、弥生土器甕 (18)、須恵器杯蓋 (19、20)、須恵器杯身 (21) が出土した。

(14) は13～14世紀に属するものと考えられる。(15) の高台部は貼り付けであるが高く内外面ともにナデが施されている。内面の暗紋は密で、見込みの暗紋も観察される。12世紀に属すると思われる。(17) は平城Ⅱに属する土師器杯で、内外面ともにナデが観察される。色調は内外面ともに黄から橙色で、胎土中に長石を含み、焼成は良好である。(18) は弥生土器で、おそらく2層掘削中に3層を掘削してしまったために出土した遺物だと考えられる。口縁部内外面はヨコナデが施され、内外面ともに指頭圧痕が観察される。内面は木口ナデが施される。色調は灰黄色を呈し、胎土中に長石、チャートを含む。焼成は良好である。須恵器の杯蓋 (19・20) と杯身 (21) はいずれも6世紀後半から7世紀に属すると思われる。第2層の洪水堆積層 (2～2層) から、多くの木製品や木が出土した。残存状態はよくなかったので写真撮影のみを実施した (図版20)。



第21図 第2層 出土遺物



第22図 第2面 遺構全体図

第3項 第2面

第3層を基盤層とする遺構面である。水成層が土壌化し、黒色を帯びた層で、上部に炭化物を多く含む（炭層）が観察されるところがあった。瓜破遺跡に押し並べて検出される層である。平成23年度の調査（調査番号11036）の第Ⅶ層に対応する。遺物は弥生時代中期から古墳時代初頭・中期に比定されるものが含まれていた。

検出した遺構は、旧流路及びピット2基、土坑1基である。

遺構

ピット1（3区）平面形はほぼ円形を呈し、直径約20cmである。深さは約5cm、埋土は一層である。

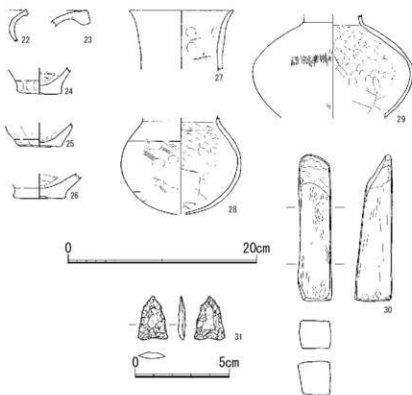
ピット2（3区）平面形はほぼ円形を呈し、直径約50cmである。深さは約10cm、埋土は一層である。

土坑3（1区）平面形は隅丸方形を呈し、長軸約100cm、短軸80cmである。深さは約20cm、埋土は三層に細分された。

いずれの遺構からも遺物は出土しなかった。

自然流路（1～3区）

先に述べてきたように本調査区は基本的に南から北に向かって比高差をもつ。中世以降、土地が安定するまで、北に存在する谷筋に向かって多くの流路が流れ込んでいたのが確認される。本遺構面で確認したのは上面に存在していた流路が深く地表面を削りこんだ部分の痕跡のみである。埋土からは図化することはできなかったが縄文から古墳時代中期までの土器の細片が少量出土した。



第23図 第3層 出土遺物（1）

包含層（第3層及びその下層）

出土遺物（第23、24図・図版16、17、18、19）

第3層以下で出土した遺物の中心は弥生時代中期である。次いで古墳時代初頭・前期、縄文時代の遺物が確認されたが、遺物量としては比較的弥生時代が多い。図化できた遺物として、壺（22～26、29）（弥生時代中期）、（27、28）（庄内式期）、他に甕、鉢、4面使用されている砥石（30）、石鎌（31）がある。また遺構面精査時にスクレーパー（32）が出土した。

（22、23）は壺の口縁部で、いずれも内外面ともヨコナデが施されている。（23）は端部を垂下させている。（22）の色調は、灰黄からにぶい黄橙を呈し、胎土中にはチャートと長石を含む。焼成は良好である。

(23)の色調は暗黄灰からにぶい赤褐色を呈し、胎土中には長石、石英、チャート、少量の雲母を含む。焼成は良好である。(24-26)は壺もしくは甕の底部である。(26)の内面にはクモの巣状のハケメが明瞭に観察される。いずれも胎土はやや粗く、長石、チャートを含む。焼成は良好である。(29)は壺の肩部から体部下半部が残存していた。外面の調整はハケメ、内面は上半部がユビオサエ、下半部にはユビナデと木口ナデが施されている。色調は黄褐色を呈し、胎土はやや粗く長石、チャート、クサリ礫を含む。焼成は良好である。(27)は庄内式期の壺の口頸部で、(28)は壺の体部である。(27)の色調は灰白からにぶい黄橙色を呈し、胎土中にはチャート、石英を含む。焼成は良好である。(29)の色調は灰黄から灰白色を呈し、胎土中にチャート、長石、クサリ礫を含む。焼成は良好である。

他に、縄文土器片がまとまって出土した(図版17 37、図版18 40、41)。いずれもが破片で接合し、全体を理解できる資料ではなかった。色調は暗褐色で胎土中に多量の長石、礫を含む。焼成は良好である。

以上述べてきたように3層に包含されている遺物から本遺構面は古墳時代初頭以降に比定される面だと考えられる。

第24図(32)はサスカイト製スクレーパーである。その他にも3層中からサスカイト片が出土している(図版19 38、39)。



第24図 第3層 出土遺物(2)

第4項 第3面

第4層を基盤層とする遺構面である。本調査に於けるベース層である。平成23年度の調査(調査番号11036)の第Ⅷ層に対応する。南端(T.P.+4.8m)から北端(T.P.+4.5m)まで約30cmの比高差を確認した。層厚は20cmを測る。土色は灰(10Y5/1)色で、土質はシルトであった。もともと安定した土層である。本遺構面では、ピットを27基、土坑を2基、溝を8条検出した。

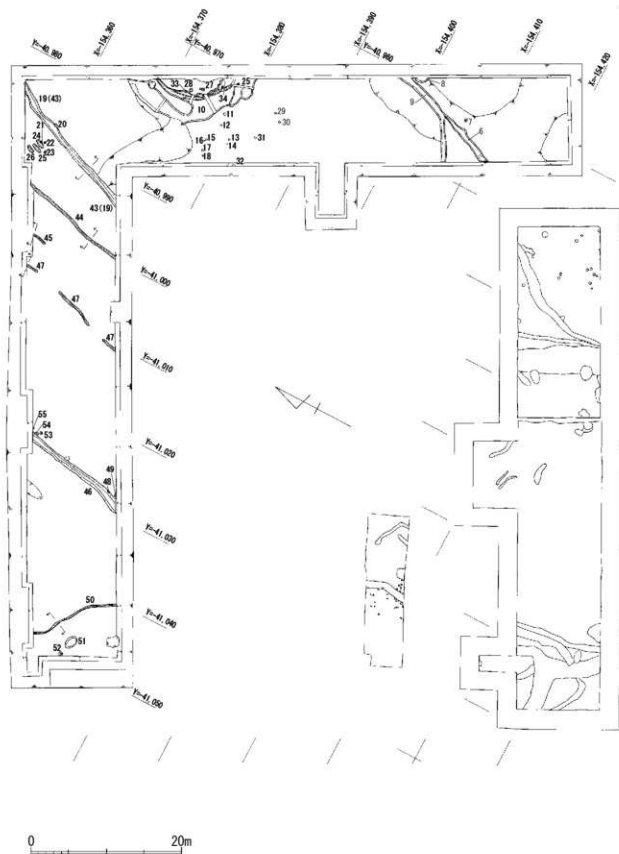
遺構

ピット

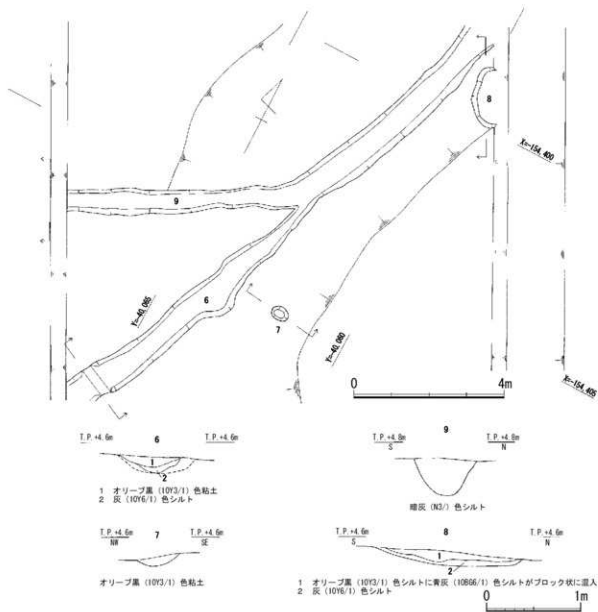
いずれの調査区でもピットを検出したが、建物を構成するものではなかった。ピットの平面形は約0.1mから0.4mを測り、ほぼ円形を呈するものが21基、長円形を呈するものが3基、方形を呈するものが1基、不整形を呈するものが2基ある。いずれのピットからも柱穴痕跡は検出されなかった。断面形は碗形、皿形、浅い皿形を呈する。埋土は基本的に1層でシルトから粘土層で、第3層が混入されているものもある。ピットの中で特筆すべき遺構は、ピット32である。本ピットは他のものとは、規模、深さともに異なる。西側は調査区外であるが、平面形は1辺約0.5mのほぼ正方形を呈すると考えられる。深さは約0.4mを測り、埋土は2層に分層できるが、大半は第3層由来の灰色粘土がブロックで混暗灰色粘土である。

土坑8(1区) 溝6と溝9が合流し北へ流れていく南側、東側は調査区外に続いていた。平面形は長円形を呈し、検出幅約0.8m、検出長約1.0m、深さ約0.2mを測る。埋度は2層に分層されいずれもがシルト層である。

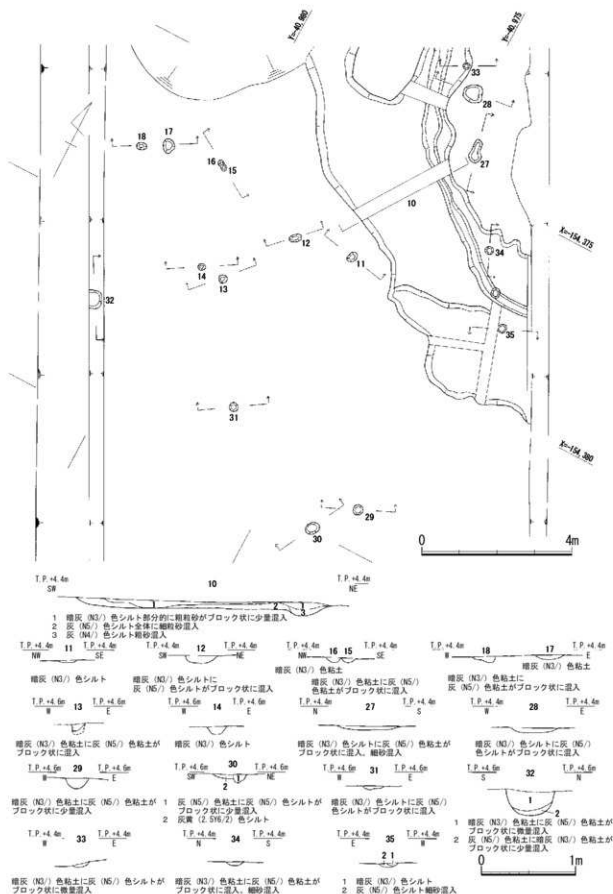
土坑51(4区) 4区の西端で検出した。平面形は長円形を呈し、長軸約1.9m、短軸約0.7m、深さ約



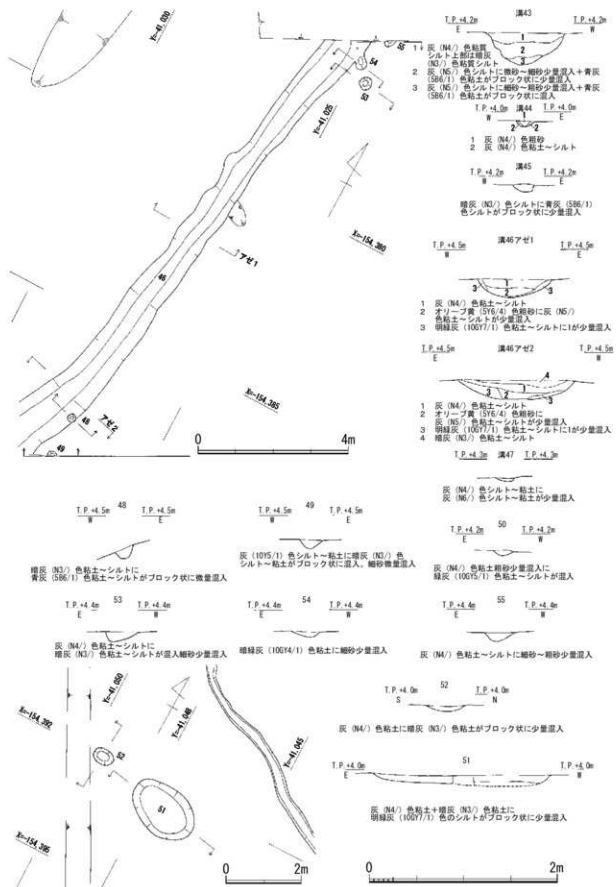
第25図 第3面 遺構全体図



第26図 第3面 遺構平面図・断面図(1)



第27図 第3面 遺構平面図・断面図(2)



第28図 第3面 遺構平面図・断面図 (3)

0.2mを測る。埋土は粘土層一層である。

溝 検出した溝8条の内7条まで南から北側の方向をとる。地形にそって流れていたものを考えられる。溝6・9（1区）、溝19（3区）+溝43（4区）、溝44~47（4区）は南から北へほぼ並行して検出された。

溝6・9 平成23年度調査（11036）で検出された第5遺構面13溝から続いている溝だと考えられる。（平成25年 大阪府埋蔵文化財調査報告2012-3「瓜破北遺跡」）

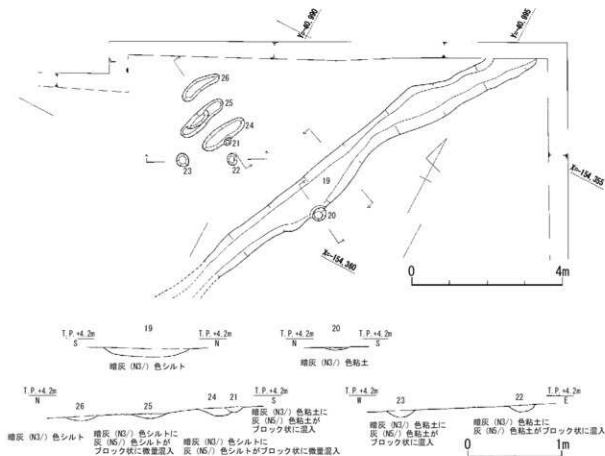
溝6の幅は約0.8m、検出長約8.0m、深さ約0.2mを測る。溝9の幅は約0.7m、検出長約13.0m、南側の深さは約0.4mを測る。両溝は、平面での切り合い関係は確認できなかったが、埋土から判断する溝6→溝9が考えられる。

溝19・43~47

溝19（3区）+溝43（4区）と溝46は規模、深さ、埋土ともに類似している。

溝19（3区）+溝43（4区） 幅は約0.9m、検出長約10.0m、深さ約0.35mを測る。埋土は3層に細分され灰色シルト層を基本としブロック土や微砂～細砂が混る。

溝46 幅は約1.25m、検出長約1.4m、深さ約0.2mを測る。埋土は4層に細分できる。暗灰からオリ-



第29図 第3面 遺構平面図・断面図(4)

ブ黄色粘土～シルト層である。

溝44、45、47は規模、深さ、埋土ともに類似している。

溝44 幅は約0.2m、検出長約14.1m、深さは約0.06mを測る。

溝45 残存状況はよくない。幅は約0.2m、検出長約2.0m、深さは約0.1mを測る。

溝47 部分的にとぎれているが、幅は約0.2m、検出長約9.5m、深さは約0.1mを測る。

いずれも埋土は1層で、灰色シルトから粘土層である。

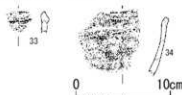
溝50 唯一北北西方向に流れをとる溝である。幅は約0.3m、検出長約12.0m、深さは約0.03mを測る。埋土は1層である。

自然流路10

3区の東側に検出した。北側・南側いずれもが調査区外である。幅は約2.7m、検出長約8.0m、深さは約0.15mと浅い。埋土は2層に細分される。

出土遺物

縄文土器甕の口縁部片(33、34)が出土した。ともに色調はにぶい黄から黒褐色を呈し、胎土は粗で白・灰・茶色の砂粒を多量に含む。焼成は良好である。



第30図 第3面 溝10出土遺物

第4章 総括

大和川航空機製作所について

今回の調査区が位置する地割は、ほぼ正方位を向く周辺の地割と異なり、N-60°-Eに振った方形を呈している。これは第二次世界大戦末期の昭和19年に建設された航空機組み立て工場「大阪金属工業大和川航空機製作所」の敷地の形状が残っているためである。

今回の調査では、工場建設のための整地作業の盛土と考えられる層や工場建物基礎が見つかった。本来ならば調査対象外であるが、終戦から70年を経てもなお残っていた資料であり、調査地周辺の戦災の歴史を知る上で重要な資料になりうると考えたので、現状で知りえたことをまとめたいと思う。

大阪金属工業は現在のダイキン工業株式会社の前身会社である。大正13年に大阪砲兵工廠出身の山田兎によって創設された。創業当初はラジエーターや空調設備、鉄道部品などを製作していたが、戦時下には航空機の機器や部品も生産していた。

軍需省軍需監理部から航空機増産のため航空機の組み立てを要請され、新工場として作られたのが大和川航空機製作所(秘匿名「神武カリガネ製作所」)であった。ここでキー45改(二式複座戦闘機「屠竜」)27機とキー102乙(双発襲撃機)10機が組み立てられ、人や牛によって誘導路をひかれて大正飛行場に運ばれた。これらの飛行機は米海軍艦艇に対する特攻作戦と、B-29に対する迎撃作戦に使われたとい

う。

大和川航空機製作所の建設に至る経緯については、ダイキン工業株式会社の社史『ダイキン工業50年史』に詳細に記されている（註1）。同書によれば、飛行機を組み立てる「全組み」は試験飛行をする滑走路を含め、広大な用地が必要であり、用地入手に困り近畿軍需監理部に相談したところ、大正飛行場（現八尾飛行場）の有効利用を勧められたという。飛行場近くに工場を建設すれば、滑走路を新たに作る必要がなくなり、検討すると用地が予定の3分の1で済むということだった。

大正飛行場は、昭和13年に阪神飛行学校として設立された。昭和15年に陸軍に接収されて軍用飛行場となり、航空廠が置かれていた。

大阪金属工業は、昭和18年秋から飛行場に隣接する大阪府中河内郡瓜破村（現 大阪市平野区瓜破地域）と大阪市東住吉区喜連村（現 大阪市平野区喜連地域）の土地所有者と交渉を始めた。横山篤夫氏の論文には、農地を提供した農民側の交渉委員の一人であった北風甚蔵氏への詳細な聞き取り調査の内容が掲載されている（註2）。金属工業は軍の助力もあり、迅速に用地買収を進め早くも同年12月には整地作業に着手した。そして翌年4月から7月にかけて各工場が建設され、稼働を始めた。各工場の名称と配置図が第32図である。

工場建設の整地作業の盛土層は、調査区全域で確認された。黒色粘土層（基本層序第6層）と地山層の明青灰色粘土（同7・8層）の混合土からなり、層厚は約0.2mであった。工場の整地作業について、北風氏は「・・・ものすごいスピードで工事しました。（中略）工場の敷地になった田畑は、北西部が低いので東側から土をトロッコにのせて、1台を2人で押して埋めるという作業でした。・・・」と語っている（註3）。

調査区付近の当時の標高はT.P.+5.4m前後であり、1.2m以上掘削しなければ（T.P.+約4.2m）これらの層に到達しないのだが、旧中野野街道に面した地区で行われたUR89-26次調査では、現代盛土および作土層を除去すると江戸時代の層が薄く堆積し、以下は地山層である灰白色砂混じり粘土層がT.P.+8.5mで検出されている（註4）。つまり戦時中には地表直下で粘土層採取することが可能であったといえる。両調査区での地山層検出の比高差は4mを超える。これは調査区から東側は瓜破台地へと標高があるからである。本調査区で確認された盛土はおそらく、この瓜破台地から採掘し運んできたものであろう。

昭和23年2月米軍撮影の航空写真（USA-M18-96）には、製作所敷地と工場建物、工場から大正飛行場に至る誘導路の痕跡が写っている（第33図）。これを現在の地図に位置を復元したものが第34図である。

製作所敷地は、南北が長居公園通から瓜破小学校前の道路までの約800m、東西は旧中野野街道から瓜破交差点までの約600mの範囲である。敷地内北寄りに位置する一辺約200mの方形区画が組み立て工場であり、現在は府営瓜破国塚住宅と瓜破中学校が建っている。誘導路は工場から大正飛行場敷地西端まで全長約3kmに復元できる。配置図では、道路間が20mと表現されているが、『平野区誌』には「幅員約二十メートルのうち中央部分約八メートルのみ盛り土して掘き固めた未舗装の誘導路」とあり（註5）、道路幅20mの誤りであろう。

昭和6年発行の陸地測量部地図によると、工場敷地付近は瓜破台地の縁辺部にあたる低地であり、長居公園通も敷地と同程度の標高であったことが等高線より読み取れる。瓜破霊園と長原集落の間に誘導路を通したのは、付近の標高が「馬池谷」の影響で周辺より低かったことが要因と考えられる。第2

図の「馬池谷」の範囲に誘導路がちょうど位置するのである。大正飛行場へ航空機を運ぶために標高の低い場所を選んだのであろう。また、全組工場のある方形区画より北側および西側は長居公園通りに比べてより低地にあたり、かさ上げや盛土等の整地作業に労力を費やすことになりかねない。それゆえこのように通りから内に入った場所に作られたのであろう。

第31図の写真で製作所内の施設を確認してみる。工場の入口付近には変電所、型鋳物工場が建てられていた。敷地南側には第一単一部品工場、第二単一部品工場が写っているが、第一工場は、上屋構造は残っていないようである。第一工場では機械加工、第二工場では板金加工が行なわれたという。部品工場の南には、第一素材倉庫、第二素材倉庫、西側には治具工場がはっきり写っている。「全組工場」と呼ばれていたのが、方形区画内に建設された主翼工場と胴体工場である。どちらも上屋構造は残っていないように見えるので、破壊されたのであろう。

全組工場の南には、仮事務所、食堂、事務所が建てられていたが、建物は確認できず、推定地付近は耕作地が広がっている。簡易的な構造物だったため、いち早く潰された農地に戻されたのかもしれない。なお、写真に見える製作所敷地北西端にある溜池は「大池」で、『平野区誌』には製作所の埋め立てで出来たと記載されている。

今回、4区北壁内で見つかった3つの建物基礎は、位置や構造などから府営住宅の基礎ではないことがわかった。明治の陸地測量部仮製地図や、『ひらのくひやくねんし』所収の昭和3年および同17年撮影の航空写真から（註6）調査地内は耕作地であったのは明らかなので、大和川航空機製作所に関わる建物基礎であると考えられる。

基礎は、一辺約8mで、木枠を組んで中にコンクリートを流し込んでいた。木枠は幅約0.04m、厚さ約0.01mの板材を組んで作られており、板材を直径0.1mの丸太で押さえて固定していた。コンクリートの骨材として、直径0.05mを超える円礫や割れた瓦を使用しているのが確認できた。通常、枠材はコンクリートが固まると外されるのだが、残された状態で埋まっていた。工場建設を突貫工事で進めていたことを物語る状況証拠であろう。調査区は主翼工場の北東隅付近に位置しており、配置図には表現されていないが、写真では建物の北側に細長い構造物が写っており、検出した基礎と位置的に一致する。

昭和19年12月19日未明、大阪市平野区瓜破付近と松原市三宅付近に米軍B-29による爆弾が着弾した。これが大阪府内への最初の空襲であった。爆弾は人家から離れた両村の田畑と大和川河床に落とされたので幸い人的被害はなかったと記録されている（註7）。爆弾の投下目標は大和川航空機製作所と大正飛行場とされているか定かではないが、確実かどうかわからない（註8）。しかし、この後50数回にわたり大阪市内を壊滅させた大阪空襲の先触れとなった。

これまで述べてきたように、大和川航空機製作所は土地区画の形成に影響を与えた事象であり、当地の歴史を語る上で重要な資料である。しかし、既往の発掘調査においては顕著な遺構は確認（認識？）されていない。今後、製作所敷地範囲内において調査が行なわれる際には、工場建物の基礎などが検出される可能性があり、注意する必要がある。

註1 『ダイキン工業50年史』ダイキン工業株式会社1974

註2 横山篤夫1992「大和川航空機製作所の用地買収と朝鮮人労働者」『戦争と平和92』大阪国際平和

研究所紀要

註3 註2に同じ

註4 「UR89-26次調査」大阪市文化財協会2000「瓜破・瓜破北遺跡発掘調査報告書」p138・139

註5 平野区誌刊行委員会2005「平野区誌」p252～253

註6 平野区役所2002「ひらのくひやくねんし」

註7 註5p254

註8 この爆弾投下に関する参考文献をあげておく。

松原市役所1985「松原市史」第2巻

「大阪空襲に関する警察局資料I—小松警部補の書類綴より—」松原市役所「松原市史資料集 第6号」

小山仁示1985「改訂大阪空襲 大阪が壊滅した日」東方出版

まとめ

最後に本調査で確認された遺構についてまとめておきたい。

今回の調査では、三面の遺構面を確認した。最終面の第3面は、弥生時代から古墳時代中期に比定される遺構面であり、平成23年度調査で検出された溝の続きであろうと考えられる溝6・9が検出された。本調査地は南から北へ比高差が約30cmあり、ゆるやかではあるが北へ落ちていく谷部の縁辺であり、これらの溝は南に存在するであろう集落のための排水の機能をもっていたのではと考えられる。

調査区から北を眺めると家々の屋根が北に向かって下がっている。これは旧地形の影響を受けているものと推測される。

以降、中世まで本調査区は安定することなく、洪水を繰り返しており、その堆積層が層厚100cmを越すほどに連綿と積み重ねられている。本調査地が安定して使用できるようになるのはおそらく14世紀前後であると考えられる。それ以降は大きな洪水に見舞われることなくいく年にもわたって耕作が実施されている。17世紀以降になると下層の堆積層が砂層であり水はけがよすぎるのか水田として利用するより、島畠として利用されていたようである。この地域一体が綿の一大産地であったことも、この土地の歴史が生み出したのかもしれない。

今回の調査の最終段階で下層確認のためのトレンチ調査（4区）を実施した。第4層以下はほぼ水平堆積の土層が確認された。土層は少量の砂混り粘土層（水成層）を基本としている。5層以下はいずれも遺構面とはなりえない。しかし、第3面の基盤層である第4層の下で溝状遺構が確認された。トレンチの規模から方向や人為的なものかどうかは明らかとできなかったが、第3面で検出した溝と同様の機能をもっていた可能性だけを指摘しておきたい。



国土地理院 USA-M18-96 の一部を使用

第31図 大和川航空機製作所 (写真)

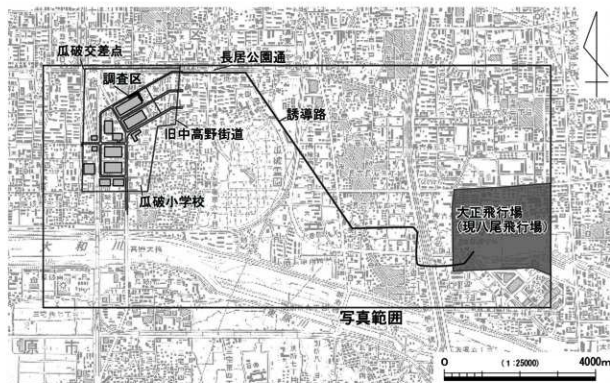


第32図 工場配置図



国土地理院 USA-M18-96 の一部を使用

第33図 大和川航空機製作所周辺写真



国土地理院発行 2万5千分の1地形図「大阪東南部」(平成20年)に一部加筆

第34図 大和川航空機製作所周辺地図

報 告 書 抄 録

ふりがな	うりわりきたいせき 4							
書名	瓜破北遺跡Ⅳ							
副書名	府営瓜破二丁目住宅建替えに伴う発掘調査							
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	2016-5							
編集著者名	井西貴子・岡林孝之・木村まり・西村雅美・藤井信之							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540 - 8571 大阪府大阪市中央区大手前二丁目 TEL. 06-6941-0351							
発行年月日	2017年 2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〇〇°	東経 〇〇°	調査期間	調査 面積	調査 原因
うりわりきたいせき 瓜破北遺跡	あびさかしひらのく 大阪市平野区 うりわりこいせき 瓜破二丁目	市町村	遺跡番号	34° 36' 37"	135° 33' 01"	20141014から 20150313	1,800 ㎡	記録 保存
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
瓜破北遺跡	集落跡 ・ 生産域	弥生時代中期～ 古墳時代前期	溝・ピット・土 坑・落ち込み	縄文土器・石器 弥生土器・土師器		縄文土器の出土		
		古墳時代中期～ 中世	洪水堆積・足跡	須恵器・土師器・ 瓦器				
		近世～近代	条里遺構・水 田・島畠	須恵器・土師器・ 瓦器・陶磁器		条里遺構・島畠遺構		
要 約	<p>盛土以下層厚2.2mを測る堆積層から、弥生時代～中世・近世にかけての集落・洪水堆積・生産域と4面の遺構面を確認した。縄文時代以前は谷地形の縁辺であり、弥生時代中期から古墳時代前期にかけて一時安定した時期があり、溝・土坑が確認された（第3面）。次いで古墳時代中期まで再び湿地となり、生産域を確認した（第2面）。また一部1.2m以上にも及ぶ洪水堆積が確認された。最終堆積層が土壌化した段階で水田として利用されていた（第1面）。近世の条里制遺構と島畠を検出。</p>							

大阪府埋蔵文化財調査報告2016-5

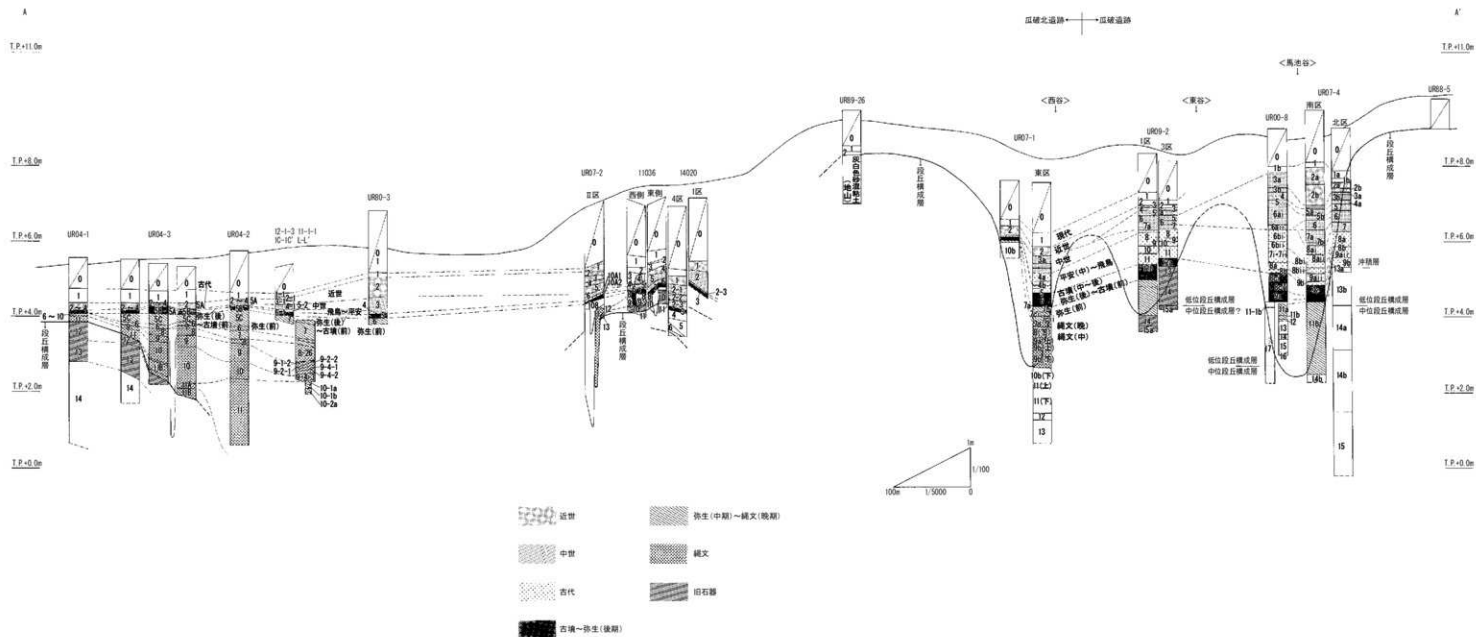
瓜破北遺跡Ⅳ

—府営瓜破二丁目住宅建替えに伴う発掘調査—

発行 大阪府教育委員会
〒540-8571 大阪市中央区大手前二丁目
TEL. 06-6941-0351 (代表)

発行日 平成29年2月28日

印刷 株式会社 近畿印刷センター
〒582-0001 柏原市本郷五丁目6番25号



第3図 A-A'ライン(第2図)断面模式図

図 版



調査地より二上山を望む

图版 1
1 区断面



南壁



西壁



2区西壁



3区西壁

图版 4
4区断面



南壁



東壁

图版 3
3 区断面



北壁



東壁



4区全景（西半部）



4区全景（東半部）



4区 坪境



4区溝36



4区溝40



4区畦畔56



1区全景



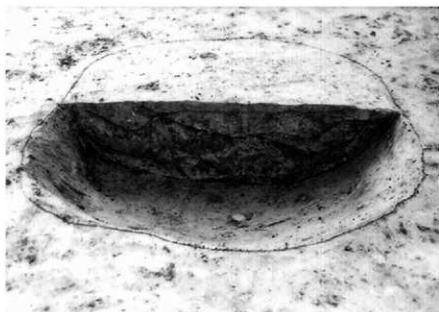
2区全景



3区全景



4区全景



4区土坑4



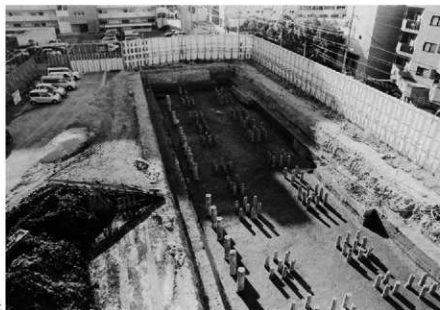
4区土坑41



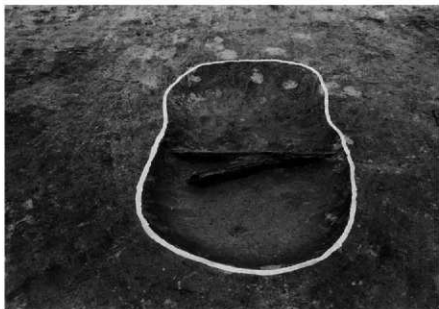
1・2区全景



3区全景



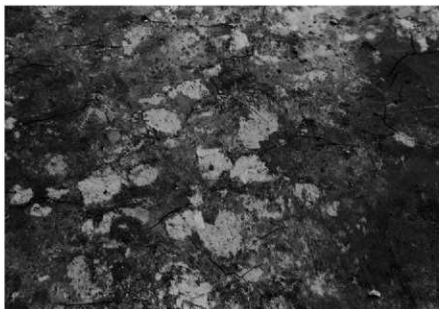
4区全景



1区土坑1



1区ビット2・3



2区足跡



1区溝6・溝9



3区溝10



4区ビット28



4区溝43



4区溝46



4区ビット48



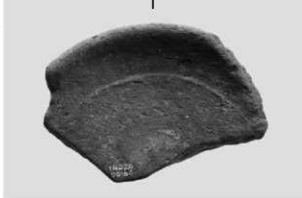
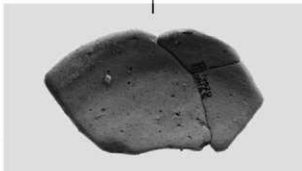
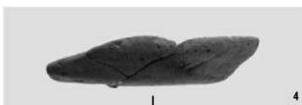
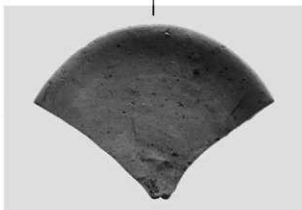
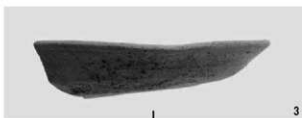
4区溝50

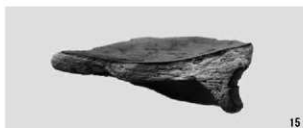


下層確認トレンチ全景



下層確認トレンチ溝59

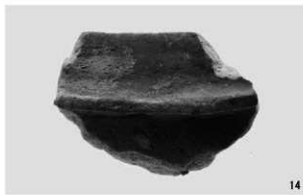




15



16



14



20



19



18



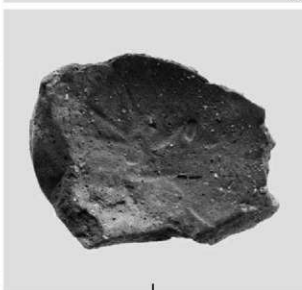
21

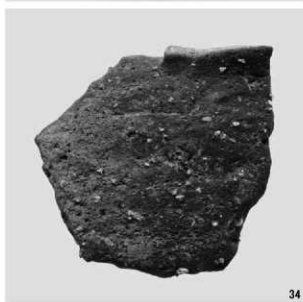
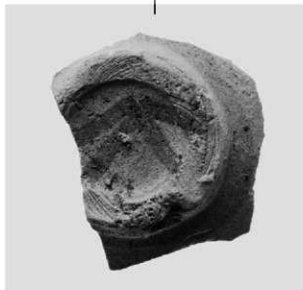
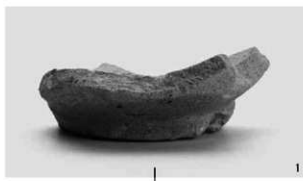


28



27





1・2：溝40(第0面) 31：落ち込み 33・34：自然流路10下層 37：3層

